



資料 ヴェーダ文献に見られるプルーラヴァス王と  
天女ウルヴァシーの物語

後 藤 敏 文

愛の神話学  
篠田知和基・編  
楽瑯書院  
2011

## 資料 ヴェーダ文献に見られるプルーラヴァス王と 天女ウルヴァシーの物語

後藤 敏文

『シャタパタ・ブラーフマナ』によるあらすじ

アプサラス（天女、おそらく水の精）であるウルヴァシー（U）は、地上の王プルーラヴァス（P）を愛し、結婚した。その際、自分に裸の姿を見せないことを条件とした。彼女は彼の下に長く（四年間）留まり、彼の子を宿す。

ガンダルヴァたち（アプサラスと対をなす存在。天界に再生した祖霊たちの姿か）は、Uを取り戻そうと計画を立て、彼女の寝台に結びつけられている子羊を奪う。その後を追ってPが裸のまま飛び出した時、ガンダルヴァたちは稲妻をひらめかせ、Uに彼の裸を見せる。彼女は姿を消す。

PはUを探し求めてさまよう。ある時、蓮池のそばを通ると、アプサラスたちが鴨に姿を変えて泳いでいた。アプサラスたちはPに気づき、姿を現す。

PはUと再会し、彼女に話し合おうと持ちかけるが拒まれ、自殺をほのめかす。Uは彼に対する同情に満たされ、一年後の夜、同じ場所へ来るように言い、自分たちの間に生まれた息子を渡す約束をする。

一年後の夜、Pがやって来ると、黄金でできた建物群があった。Uに「明朝、ガンダルヴァたちが君に欲しいものを与えることになっている」、「君たちの中の一人でありたい、と言うように」と言われていたとおり、Pはガンダルヴァたちに求める。彼らは「人間たちは祭りに適した火（祭火）を持っていない。祭火を用いて祭式を行えば、人は我々の一員になれる」と言って火を皿に移し、Pに与える。

Pは、祭火と息子とを伴って戻る。途中、後で取りに来るつもりで火を荒野に置き、息子だけを連れて村落に入る。彼が火を置いたところに戻ってみると、火は消えてアシュヴァッタ（インドボダイジュ）の木となり、火鉢はシャミー（アカシアまたはミモザの仲間）に姿を変えてい

た。彼は再びガンダルヴァたちのもとへ行くと、それらの木を用いて祭火を作り出す方法を教えられる。祭火を手に入れた P はその火で祭式を行い、死後天界に至って、ガンダルヴァの一員となる。

## 1. 原資料

人間界の王ブルーラヴァスと、天に住むガンダルヴァたち（広義には神々に属する）の一員、天女ウルヴァシーとの恋愛を主題とする物語はヴェーダ文献に複数の物語として遺されており、後代にも好んで語られ、また、作品に編まれた。特に、この物語の源泉となったと判断される諸伝承がヴェーダ文献に複数伝承され、文化史的にも、ヴェーダ宗教を理解する上でも、また、文学的価値においても、重要な資料となっている。以下、原典の所在と主な翻訳などを列挙する。

「ウルヴァシー」の語源に触れておく必要がある。GOTŌ Fs. Narten 102 n.85.に KLINGENSCHMITT の見解（口頭）を挙げておいた通り、*urvašī-* は \**ur̥uek-ih₂-* に遡り、ラテン語 *ueruēs* 「雄羊」 < \**ueruek-s* の女性形と解釈され、元来「雌羊」を意味したと考えられる。「ブルーラヴァス」は、一般に「幾度も叫ぶ者」と解釈されるが、KLINGENSCHMITT によれば *purūrāvas-* < \**pl̥h₁u-ur̥h₁e(-)ues-* 「多くの子羊 (\**ur̥h₁(-)én-*, 古インドアーリヤ語 *úrān-*) をもつ者」 または \**pl̥h₁u-h₂ul̥h₁e(-)ues-* 「多くの羊毛 (\**h₂ul̥h₁-náh₂-, úrnā-*) をもつ者」と解釈できる。従って、「P と U」の物語の背景には、専ら牛の崇拜の背後に隠されて表に現れない羊の神話が隠されている可能性がある。そのことは、RV 詩節 2 に暗示されている可能性があるが、シャタパタ・ブラーフmana、そして、バウダーヤナ・シュラウターストラの伝承には、よりはっきりと打ち出される。ガンダーラ (KRICK Feuergründung p.222 注 555 参照)、さらには、紀元前 3 千年紀に、現在のトゥルクメニスタン、カザフスタン、アフガーニスタン付近に定住城塞都市を築き、インド・イラン共通時代（イラーン諸部族とインダス河流域に入る前のアーリヤ諸部族の共通時代）に大きな影響を与えたと考えられる先進文明、所謂 Bactria-Margiana Archaeological Complex (BMAC) の記憶を留める可能性がある。BMAC の遺跡に見られる多数の羊の墓、出土している鳥衣とも羊の衣ともとれるものを纏った女神像などは注目される。

### 1) 『リグヴェーダ』第 X 卷 第95 讃歌

およそ、紀元前1200年頃編集されたものと推定される。翻訳は、K. F. GELDNER Der Rigveda 第 3 卷（1920 年代末の訳、1951 年出版）中に収め

られたものに代表されるが、動詞の語法研究のためにこの讃歌を詳細に検討したKarl HOFFMANN *Der Injunktiv im Veda*, 1967, p.199–207 (1950年完成、未公刊のGELDNER 訳を利用することができた) が理解の到達点として依拠されることが多い。邦訳には、辻直四郎『リグヴェーダ讃歌』岩波文庫 1970, 292–296 がある。また、筆者は、Paul THIEME が1978 年秋、Erlangen 大学で行った講演に居合わせ、出版されずに終わったハンドアウトを持っているが、必要に応じてこれに言及する。

2) ヤジュルヴェーダ散文文献：『マイトラーヤニー サンヒター』I 6,12:106,1–7, 『カタ・サンヒター』VIII 10:9,15–94,1, 『カピシュタラカタ・サンヒター』VII 6:<sup>2</sup>90,7–15

およそ紀元前 800 年頃に遡る古拙な散文で書かれた資料である。祭式に用いる讃歌、祝詞の類（マントラ）の解釈、効力の吟味に始まり、祭式に用いられる材料、道具、行作、順番などに関する神学的議論を集成した文献群に、根拠として神話が引かれることがあり、その中に、「プルーラヴァースとウルヴァシーの物語」の簡潔な姿が見られる。T. GOTO *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 39 (1980) p.11, Kyoko AMANO *Maitrāyaṇī Saṁhitā I-II* (2009) p.258f. に『マイトラーヤニー』の独訳がある。

3) 『シャタパタ・ブラーフマナ』XI 5,1,1–17

上記のヤジュルヴェーダ・サンヒターの散文（ブラーフマナ *brāhmaṇa* とよばれている）に引き続き、ヤジュルヴェーダ（祭式の実務を担当するアドゥヴァリユ祭官が護持する文献群）に改革をもたらした「白（純粋）ヤジュルヴェーダ」学派（ミティラーを中心とする「ヴィデーハの人々」に本拠地をもったヴァーージャサネーイン派）のブラーフマナ（テキスト名として *Brāhmaṇa* とよばれる）である『シャタパタ・ブラーフマナ』（「100 の道から成るブラーフマナ」の意）の中に、『リグヴェーダ』の詩節を引きながら物語が語られ、祭火設置祭の根拠付けに用いられている。時代としては、紀元前 7 世紀頃が想定される。

英訳に、F. Max MÜLLER 1856, J. EGGELING 1900 (SBE 44, p.68-74), 独訳に、A. KUHN 1859, A. WEBER 1868, GELDNER 1888, 仏訳に、J. VARENNE 1967 (MLB p.108-111), 邦訳に、辻直四郎『古代インドの説話』1978, 28-32頁などがあり、研究や言及は多数に上る。辻直四郎による「解題」(31-33頁)を参照されたい。

#### 4) 『パウダーヤナ・シュラウタースートラ』 XVIII 44-45

ヴェーダ文献が予定する祭式のうち、宇宙の運行や部族全体に関わる大規模な祭式群（同時に、諸々の祭官職を編成し、総動員することを意味する）がはじめに整備された。上記 2), 3) に言及した文献群もこれを対象としている。ヴェーダ文献本体（マントラを集成した「サンヒター」と神学議論の集成である「ブラーフマナ」）の編集固定がなされた後、これら大規模祭式について、その実行次第を念頭に置いた文献群「シュラウタ・スートラ」（学習による、つまり、伝承されてきた〔祭式〕に関する手引き、の意。次第に綱要書としての色彩を強めてゆく）が編集された。その中、最も古い文献が『パウダーヤナ・シュラウタースートラ』である。第 18 巻は、本来、本体部分の末尾であったと考えられるが、一日で終わるソーマ祭に関する解説という枠組みの下に、神話、伝承の類が収録されている。ここに見られる「PとU」の伝承には、羊との関連が強く打ち出されている。時代としては、紀元前 5 世紀頃に遡るであろうか。

独訳に、H. KRICK *Das Ritual der Feuergründung (Agnyādheya)* 1982, p.213-217, T. GOTÖ *Anusantatyai. Fs.Narten* (2000) p.99-110, 英訳に、C. G. KASHIKAR *The Baudhāyana Śrautasūtra, Vol. III* (2003) p.1235-1239 がある。

#### 5) 『ヴァードゥーラ・アヌアーキヤーナ』 I 1-2

上記 4) は「黒ヤジュルヴェーダ」と総称される古いヤジュルヴェーダ学派の新層、白ヤジュルヴェーダへの繋ぎに位置する「タイッティリーヤ派」の一分派「パウダーヤナ派」の文献である。同じタイッティリーヤ派の一分派に「ヴァードゥーラ派」がある。同派のテキストは最近まで写本によって

知られ、W. CALAND の 1920 年代の諸論文によって紹介されるに留まっていた。近年になって、CALAND が、利用した写本群の元に想定していた写本を含むと考えられる優れた写本群の収集に、井狩彌介がケーララで成功し、状況が変わってきた。また、B.B. CHAUBEY による独自の出版が継いだ。「P と U の物語」は、ヴァードゥーラ派の祭式等文献群の中、シュラウターストラに付随するアヌ・アーキヤーヤナ Anvākhyāyana (付随解説, ほどの意) の冒頭に含まれ、井狩収集の写本によって初めて紹介された (1995)。妻の実家におけるの出産、命名など、母系的社会の存在をより鮮明に打ち出し、上方に祖霊たちの世界、その上に神々の世界があり、そこへ通じる道が原野 (aranya-) にあるとされるなど、他の文献には明確に語られることのない興味深い内容をもつ。文献の時代としては、上記 4) に続く時代が考えられよう。

独訳に、GOTŌ Fs.Narten 2000, p.79-99, 邦訳に、後藤敏文、新資料 Vādhūla-Anvākhyāna の伝える「Pūrūravas と Urvaśī」物語、神子上恵生教授 頌寿記念論集『インド哲学佛教思想論集』, 2004, 845-868 頁がある。

#### 6) リグヴェーダの注釈文献類

『ブリハッド・デーヴァター・アヌクラマニー』(神格索引拡大版), 『サルヴァ・アヌクラマニー』(「全索引」, すなわち, 詩人・神格・韻律索引) に対するシャッドグルシシュヤ Ṣaḍguruśiṣya 注。いずれも後代の資料である。

#### 7) 叙事詩・物語類

『マハーバーラタ』においては、ヤヤーティの誕生に至る系譜の中で、「P と U」への簡単な言及が見られる: プーナ批判版 I 70,16-23 (上村勝彦『マハーバーラタ』1, 2002, 290-291頁)。『ハリ・ヴァンシャ』批判版 XXI 章にも言及が見られる。「プラーナ」(昔のこと, 古伝)と称される各種文献群に採られているが、特に、『ヴィシヌ・プラーナ』パロダ批判版 (Pathak 1999) IV 6,23-50 (章末), 『マツヤ・プラーナ』XXIV 1-35 の二伝承が有名である。後者は、リグヴェーダ以来の伝承を離れた独自の改編を示し、『パドマ・プラーナ』, 物語を集成した『カター・サリットサーガラ』(物語の

大海) XVII 4-30 に引き継がれるとされる。

## 8) 文学作品

『ウルヴァシーの物語、武勇の巻』 Vikramaorvaśīyam はマツヤ・プラーナの系統に連なる伝承を劇に仕上げたもので、カーリダーサ (4世紀末頃か) の代表作品の一つである。大地原豊によって、「武勳 (王) に契られし天女ウルヴァシー」の題で『公女マーラヴィカーとアグニミトラ王, 他一篇』, 岩波文庫 (1989) の後半に訳出されている (114-220頁, 解題 224-229頁)。

ヴェーダ文献に関する参考文献には, H. KRICK *Das Ritual der Feuergründung* (Agnyādheya) 1982, p.203-223, 辻直四郎『古代インドの説話』1970, 解題 31-34 頁が, 読み物として広がりのあるものに, 田中於菟彌「天女うるわしい」『印度さらさ』1943 (『酔花集』1974, 197-213 頁に再録), 佐々木理『物語溯源』1943, 特に1-59頁「アモールとピュシューケー」がある。

## 2. 『リグヴェーダ』 X 95

『リグヴェーダ』(以下RV) にはカーティヤーヤナ作 (年代不明, 紀元前 3世紀頃か) と伝えられる索引があり, 作者 (実現力のある正しいことばを, 興奮状態で「見る」ことのできる詩人かつ祭官で, リシ「荒ぶれる者」, カヴィ「見者」, ヴィップラ「うち震える者」などとよばれる), 捧げられる神格, および, 韻律を挙げる。RV 第 10 卷第 95 讃歌については, 作者は, 第 1, 3, 6, 8-10, 12, 14, 17 詩節をイダーの子ブルーラヴァスに, 第 2, 4, 5, 7, 11, 13, 15, 16, 18 詩節をウルヴァシーに帰しているが, 詩節の発語者を当てはめたものに過ぎない。捧げられる神格にはこれを入れ替えたものが当てられ, 聞き手を謂うに過ぎない。韻律は 11 音節×4 行から成るトゥリシュトアップ *Trīṣṭubh* である。これは, 実態に合うが, 詳しくは, 訳の後に付した原文に注記する。以下, P: ブルーラヴァス, U: ウルヴァシー。詩の背景には, 火鑽りの儀礼 (火鑽り台 [女性を象徴], 火鑽り棒 [男性を象徴],

羊毛, バターオイルを用いる), (冬に渡ってくる) 鴨, 羊 (への信仰), などが重ねられている可能性が考えられる。自然現象, 宇宙の循環, 人事に亘る多層のことがらを詩行に重ねて歌うことは, リグヴェーダ一般の特色である。

## 1 (P)

ひどい。<sup>1</sup> 妻よ。考えを [まじえた] —止まれ, おそろしい女よ—<sup>2</sup>

交えたことばたちを交わそう, さあ。

私たちの考えていることどもが口にされずにおわれば, これらは  
なぐさめをなさないであろう, もっと先の日に [なつたとし] ても。

<sup>1-1</sup> 痛み, 哀れれみを乞うなどを示す間投詞, cf. HOFFMANN Inj. 199 n. 177参照。GOTŌ Die “I. Präsensklasse” im Vedischen (1987) 252 n. 570。

<sup>1-2</sup> U は *mānas-*「考え, 理性」ということばに反発して立ち去ろうとし, そこで慌てた P がこのことばを挿んだものと考えられる。P は, 「ことばを」と言い直し, *mānasā* (Instr. 形, 「考えによって, 考えとともに」) を引き継ぐべく, Instr. 支配の形容詞「交えた」*miśrā* を言い足したものと考えられる。*miśrā kar*「交わす」という解釈も考えられるが (PW, GRASSMANN, GELDNER, THIEMEこれによる。他に用例は知られない), *vācam kar*「ことばを発する」は X 34,5 (賭博の歌)により確かめられる (口語的か)。*ghore*「おそろしい女よ」は「野生の女よ」(“du Wilde”, THIEME 講演 Erlangen 1979)とも解釈できるが, 「無慈悲, 酷い, 恐ろしい」を謂うことが普通である, 特に, 同じく賭博の歌 X 34,14 参照。

## 2 (U)

これらはいったい,<sup>1</sup> (つまり) 君のことばによって, 私が [何を] なしたらよいのです?

私は去ったのです。曙たちの中で, 最初の [それ] のように。

ブルーラヴァスよ, 家へと戻り去れ。

私は, 風のように, 届きがたい [女] です。

<sup>2-1</sup> 鴨に変身した天女が独特のことばを話したと解釈しない限り, *etā* は Instr. Sg. f.



ではありません、「これらのことばたち」(n. Pl.) と始めて、言いさしたものと考えられる。この点、およびこの詩節について、堂山英次郎『リグヴェーダにおける 1 人称接続法の研究』 大阪大学大学院文学研究科紀要 45-2 (2005) 298f. 参照。

### 3 (P)

矢はえびらの見栄えのためではない。<sup>1</sup>

牛を勝ち得る飛び道具だ、百 [頭の牛] を勝ち取る [戦車] 競争のように。

男手の無い、火急時に、<sup>2</sup> 彼らは閃きわたったのか。<sup>3</sup> いや [違う]。

子羊が鳴き声を [放つ] ように、<sup>4</sup> 物音たてる彼らは輝いた (ものだった)。

<sup>3-1</sup> GELDNER は「矢の一撃が、栄えある賞のために、えびらから (飛び出すように、捕えることは不可能だった)」と解する。確かに一見、第1行目と2行目の *ná* はそろった位置にあるが、一方は否定、一方は喩えと解すべきである。THIEME (講演 Erlangen 1979) の訳に従う。この行は 8 音節からなり、ことわざを引いたものと解すべきである。P は裸を見られるに至った経緯を憤慨して訴える。これが、何よりも、P が U に言いたかったことであろう。

<sup>3-2</sup> 文字通りには「勇者のいないときに、精神力において」。THIEME 「それを行動に移す男手がなく意志だけがあるときに」。HOFFMANN 「男なしに、精神力なしに (<sup>3</sup>*krátau*, それらが不在だとして) 稲光がしたわけではない」。

<sup>3-3</sup> 3人称単数による非人称構文「稲光がしたのか」も可能。

<sup>3-4</sup> 「ように」と訳した *ná* には、未知の機能が隠されているかもしれない。「一方では子羊が啼き」というような文脈が相応しい。<sup>9-2</sup> 参照。

### 4 (P)

彼女は、良いものとして若さの力を<sup>1</sup> 舅に定めつつ

一曙さん<sup>2</sup> [舅が<sup>3</sup>] 望む度に、家の近くから、

彼女が [それを]<sup>4</sup> 気に入っていた家に帰り着いた (ものだった)。

[彼女は] 昼に夜に籐の棒で突かれた。

<sup>4-1</sup> または、「良い若さの力を」。THIEME は、U は水の精であるから財産を持たず、「(結

婚の持参品) 品」として「生命力」をもたらしたものとする。

<sup>42</sup> *úṣas*: 第 2 詩節の 2 行目にある U のことばを皮肉ったものか (U は、そもそも、曙として地上に現れるものとしても想定されている可能性がある)。語形からは、呼格形と判断され、従って、この語から行が始まると解される。*uṣás* であれば、単数所有格 (「曙の間に」)、または、複数対格 (「曙ごとに」) の可能性がある。

<sup>43</sup> あるいは: 彼女が。

<sup>44</sup> 関係副詞 *yásmín* は「家において」を含意するので、気に入る対象が補われることが期待され、次行がそれに当たると判断される。

## 5 (U)

日に三度、君は籐の [棒] で私を突いたものだった。

さらに、私が求めている時にも、私に与えたものだった。

プルーラヴァスよ、私は君の意図に従っていた。

私のからだの、勇者よ、その時、君は王様でした。

<sup>5</sup> 過去の回想により、U は P に心を引き戻される。

## 6 (P)

よく燃え立った、好意における仲間である<sup>1</sup>、

池における視力<sup>2</sup>のように、もつれあって活動する列である、

それら、際立った [女] たちは、赤い [曙] のように<sup>3</sup> 走った。

乳を出す雌牛たちのように、見栄えよく鳴いていた。

<sup>6-1</sup> 「仲間」 *āpi-* にもいろいろな種類があるが、ここでは「仲良し」であることを謂う。

<sup>6-2</sup> 「池における視力、目」が比喩であるとすればミズスマシのようなものを指すか。「池の中で視力・目として」という解釈も可能であるが (<sup>6-2</sup> 参照)、その場合、鴨たちを指す。

<sup>6-3</sup> ここでも、「赤い曙として」と解する可能性もある。「赤い」の語形 *aruṇáyas* は「際立った、化粧をした [女]」 *añjáyas* の語形に引かれ、*-i-* 語幹ではなく、例外的に *-i-* 語幹の活用形をとっている。

3699  
7 (U)

彼が生まれてくるときには、[神々の] 后たちが集い座っていた。

そして、自分たちで自分たちを歌い迎える川たちが、それ(彼)を育てたの

です、

神々は、プルーラヴァスよ、君を偉大な戦いのために、

ダスヌ<sup>1</sup>を討ち負かすために育てたのだから。

7-1 敵対する部族。

## 6 → 8 (P)

一緒に、かの人間ならざる[女]たちが旅衣を脱ぎ捨てつつある中に、<sup>1</sup>

私が人間の子として仲間になっているとき、

怯えている雌羚羊<sup>2</sup>のように、私から、

彼女たちは、逃れ去ったものだった、戦車に触れる馬たち<sup>3</sup>のように。

8-1 鴨の姿で渡って来たアプサラスたちが本来の姿を現そうとする時のことを謂うものと思われる。

8-2 *bhujús*。他の箇所では男性名詞で、アシュヴィン双神が西の果ての海で救出する人名として用いられる(沈んだ太陽を隠喩、原意はおそらく「償う者」)、cf. “*Ásvín- and Násatya- in the Rigveda and their Prehistoric Background*”, *Linguistics, Archaeology and Human Past in South Asia*, Ed. T. Osada, 2009, 206, 213 n. 30)。「逃げる女ブジュのように」(?). *mát tarásantī* 「私から、怯えている」は HOFFMANN の注記する通り、*mát trásantī* から音節構造上変化した形であろうが、同時に、発語上避けられない *mát rásantī* 「叫び立てる」との混同誤解を避けたものと解される。代名詞 *tás* の位置が例外的であるとしても(「そのような、つまり鴨のままの姿で」とも解される)、*ápa* 「離れて」は本動詞 *atrasan* 「怯えて(逃れ)た」と結ぶのが自然である。

8-3 戦車を牽く馬のからだに戦車の本体部分が触れることを恐れる様。

## 9 (U)

彼女たち、不死の者たちに親しみ触れる死すべき者が、  
群と交わる時、一意志の力たちと [交わる] ように<sup>1</sup>  
彼女らは、鴨たちのように、<sup>2</sup> 自分のからだを飾る (ものなのです)、  
戯れる馬たちが嘯み合うように。

<sup>9</sup> U は、P が8 に述べることは、アプサラス (あるいは、女たち一般) のコケトリー  
だ、と皮肉を込めてたしなめる。

<sup>9-1</sup> 意味不明。アプサラスたちはガンダルヴァの男たちと同族であり、ガンダルヴァ  
たちは死後天界に生まれ変わっている祖霊を意図することが多いこと (後藤敏文「業  
と輪廻」『印度哲学仏教』24, 2009, 32頁参照) をも考慮すべきかもしれない。

<sup>9-2</sup> おそらく、「鴨たちとして」。この意味での *ná, iva* については、T. GOTÔ, RV Bd.1,  
I 131,2 に対する注記参照。

## 10 (P)

稲妻のように、<sup>1</sup> 飛びながら瞬いている<sup>2</sup> 彼女、  
私に<sup>3</sup> 水からもたらされる<sup>4</sup> 望みの物たちを運びながら、  
—水から、男児が立派に<sup>5</sup> 生まれたね—  
ウルヴァシーは自らの長い寿命を全うする。

<sup>10-1</sup> あるいは、「稲妻として」、→ <sup>9-2</sup>。

<sup>10-2</sup> あるいは、「瞬き (続けて) いた」。

<sup>10-2</sup> または、「私の」。

<sup>10-4</sup> あるいは、「水の娘は」。

<sup>10-5</sup> 「よく」という副詞が用いられないため、「よく生まれた男児が生まれた」と表現さ  
れる。

## 11 (U)

君は、本当は、[人々の] 庇護<sup>1</sup> のためにこそ、生まれたのだ。  
君はその力<sup>2</sup> を、プルーラヴァスよ、私に置いた。

私は知っていたので、君を諭しました、あの同じ日に。

君は私の [言うことを] 聞き入れませんでした。何の無益なことを<sup>3</sup>君は語ろうとするのです<sup>4</sup>?

<sup>11-1</sup> 文字通りには、「牛たちを護る職のために」。

<sup>11-2</sup> *ójas-*, 主として肉体的力を謂う, 対応する形容詞 *ugrá-* 「強い」(「武官」の意味でも用いられる) 参照。ラテン語 *augustus* 「高貴な」 < \**h<sub>2</sub>eugos-tó-* は、これに当たるものを備えた, という意味の語に遡る。

<sup>11-3</sup> *abhüg* を中性・単数・対格と解した。または、男性・単数・主格と解し、「役に立たない君は」, 即ち、「無駄に、無駄だ」とも解せる (副詞的修飾は、主語に懸かる形容詞によって表現されることが多い)。

<sup>11-4</sup> *vadási* は接続法であり、「口にする, 議論することになる, 論じようがある」(未来, 見込み), 「口にせねばならない」(話者, または, 主語以外の意志) などと解釈できる。話者の意思を強くとれば, 「君に言わせようか」とも解される。疑問文では, 主語の意志が接続法によって表現され得た可能性(「口にしたい」)も検討する余地がある。なお, 「諭しました」, 「聞きませんでした」は, 回想の文に *Injunktiv* (言及法) が用いられている環境の中で, 現在語幹の過去形 (*Impfperfekt*) を用いて述べられている。聞き手が知らない(忘れた)ことを前提とした表現を敢えてしたものとも考えられる。他に, *Imperfekt* の使用は, *Injunktiv* が作られない *i* 「行く」, *as* 「ある」の場合 (5cd) を除き, 7「育てた」(2回), 8(*sma* と), 16「食べていました」(先行する副文中にも2回)に見られる。

## 12 (P)

何時, 生まれた [ばかり] の息子は父を求めるようになるのか?

分別がつけば, 車輪のように涙を転がすものだ。

誰が, 思いを一つにした夫婦を引き離すものか。

舅たちの下に, 火が輝いているであろう, その時に。<sup>1</sup>

<sup>12-1</sup> 両親が家を取り仕切っており, P と U とは若夫婦に当たる。

12. 父 } 競争  
13. 母 }

## 13 (U)

涙を転がしたら、[その子には] 私が答えましょう。

優しい思いやりを求めて、車輪のように泣きだてるのです。<sup>1</sup>

私たちの下にある君のそれは、私が君に送り [返し] しましょう。<sup>2</sup>

家へと立ち去りなさい。愚かな人、君は私を得ることはないのだから。

<sup>13-1</sup> P が、こぼれる涙を車輪の回転に喩えたのを受け、車輪の喧しさに喩を転じている。HOFFMANN の注記 (Der Injunktiv im Veda, p.206) 参照。

<sup>13-2</sup> 中性単数による表現に U の苛立ちが込められている。

## 14 (P)

良き神々をもつ者が<sup>1</sup> 今日、戻らぬ者として身を投げる [なら]、

行ったきりの最果てへと行くために、

そうして、「破滅」(の女神)の膝の上に横たわる [なら]、

そうして、ひっさらう狼たちが<sup>2</sup> その者を食らう [ならば]。

<sup>14</sup> 現在語幹願望法の動詞 (3人称単数) が 3 つ用いられているが、アクセントを伴っており、文が完結していないことを示す。ここでは、仮定文として訳した。あるいは、「よい神々に恵まれた者と [なるでしょうよ]、もし... したら [その人は]」。

<sup>14-1</sup> 自虐的表現を 3 人称で「幸せ者が」と表現したものと思われる。

<sup>14-2</sup> 狼に食われると骨がばらばらにされ、他の場所に持って行かれるという。骨が完全にそろわなくなり、再生できなくなる恐れを謂うものと解釈される。

## 15 (U)

プルーラヴァスよ、死ぬな。身を投げるな。

そして、不吉な狼たちが君を食らわぬように。

女たちからなる仲間関係 (諸々の連帯) は存在しないのです。

ここにあるのは、ハイエナたちの心臓です。

↓  
男の子 男の子  
||  
→ 狼の心臓  
↓

15 後半二行は、部族の決定事項、交渉、遠征などは成人男性（家長たち）が担っており、女たちはそうした社会の成員の一人一人に、個々に属する存在にすぎないから、男たち（ガンダルヴァ、神々）と交渉するよう謂うものと思われる。女たちは、狼の食べ残しに与る存在にすぎないことを、ハイエナの語（*sälävrká* は「走り去れ狼」という文を縮めて作った複合語に遡る）を用いて巧みに表現している。「心臓」には「意志の力」と「欲望」があるとされ、第 1 詩節に述べた「思考」への忌避感による解釈が正鵠を得ているとすれば、「思考」と対比して、女たちが社会の決定に関わらないことを補強しているように思われる（男たちは思考に関わるが、女たちは心臓で生きる）。

## 16 (U)

私が姿を変えて、死すべき者たちの間で活動していたとき、  
 四秋の間、夜を過ごしたとき、  
 バターオイルの滴りを、日に一度、食べていました。  
 それ以来というもの、ここに満足したままでいます。

16 以下 3 詩節は、P と U の神話を祭式と祭火の起源に結びつけるために作られている。「バターオイル」は 18 の「供物」が意図するものであり、供物の由来を U の地上での喜びによって根拠づけている。『シャタパタ・ブラーフマナ』は、RV が 15 詩節からなる「会話」を伝えているとするが、1, 2, 14, 15, 16 詩節を引用しており、この詩節は RV に本来含まれていたことになる。RV 編集の基本方針（詩節数の多い讃歌から順に配列）から判断して、X 95 の位置には 14~13 詩節が期待される（X 91-93 は 15 詩節、94 は 14 詩節、96 は 13 詩節を持つ）。OLDENBERG *Prolegomena* 248, *Noten* 同所, GELDNER *Vedische Studien I* 294f., RV 翻訳同所への注などの試みにもかかわらず、この問題は未解決に残る。見事に構成された本体部分 1-15 に、1~2 の付加を想定すべきであろうか。それとも、SB の意図するところは何らかの別の事情を謂うものであろうか。

## 17 (P)

天空を満たし、空間を測り分ける

ウルヴァシーに近づきたい<sup>1</sup>、最上の者（ヴァスイシュタ）として。

善き行為の恵みが、君の下にある（届く）ように。<sup>2</sup>

戻れ。私の心臓は熱く苦しんでいる。

17-1 文字通りには、「近くにあることを (*úpa*) 可能にしたい (*śak* 「できる」の *Desiderativ*)。

17-2 地上における「善行」を天界に届けておき、死後（君とともに?）それを糧として天上の生活をしたい、というものである。この主題は、阪本（後藤）純子「*iṣṭāpūrtā-* 『祭式と布施の効力』と来世」（今西順吉教授還暦記念論集『インド思想と仏教文化』1996, p.882—862）とその改良版 J. Sakamoto-Gotō “Das Jenseits und *iṣṭāpūrtā-*” (Indo-irisch, Iranisch und die Indogermanistik, 2000, 475—490) が詳細に解明した。

18 (U)<sup>1</sup>

H こう

かくも<sup>2</sup>、君に、ここにいる神々は言う、イダーの子<sup>3</sup>よ。死を係累にもつ君が、そもそも、どうしたら、そう、[つまり]このようになるか<sup>4</sup>を。

君の子孫は、供物によって<sup>5</sup>神々を祭るように。

他方、天界で君も、また、楽しむように<sup>6</sup>。

VIII 77, 1

18-1 神々の裁定 (15 への注記参照) を U が伝える詩節と解した。P と U 以外の「天の声」とも考えられる。

18-2 *iti*: あるいは「そう」<sup>2</sup>、つまり「以下のように... 神々は言っている」/「言う、言っている」に当たる *āhur* (単数 *āha*) は完了形であるが、常に現在の価値で用いられる。「言う」と訳す場合には、事実上、これから起こる内容を指すことになるが、これも現在直説法の機能の一つである。に数えられる

18-3 イダー（原義は「滋養」）は、マヌが洪水の後、乳製品を水へ献供して生じさせたマヌの娘である（辻直四郎『古代インドの説話』17—21頁参照）。P は、マヌとイダーの間に生まれた第二代の人類と解される。

18-4 *etād bhāvāsi*: あるいは、*idam bhū* 構文（後藤敏文『印度学仏教学研究』55-2, 2007, 809—805, T. Gotō *Indologica*. T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume, 2008, 117—122参照）と取り、「これ（ウルヴァシーに近づくと、つまり、天界の一員となること）を管轄・支配するようになる」、つまり「これを可能にする」とも解釈できる。



18-5 16 への注記参照。

18-6 文字通りには「自らを酔わせるがよい」。死後、天界で(ガンダルヴァ,あるいは、神々の一員として、U と一緒に)暮らすことを謂う。P の子孫(男子)は、地上で、神々に供物(U の好きだったバターオイル)を送り届ける。生産が地上でのみ行われると想定されていたことについては、後藤敏文、神子上恵生教授頌寿記念論集『インド哲学佛教思想論集』859f. 参照。詩節 4-5 は、性生活も地上の営みとされていた可能性を示唆するかと思われる。

### 原文 Ṛgveda X 95

各行の右側に、韻律上の注記と動詞語形(便宜上ドイツ語術語による)を挙げる。

- |    |   |   |
|----|---|---|
| 1. | <i>hayé jāye mánasā tīṣṭha ghore<br/>vácāmsi miśrā kṛṇavāvahai nú  <br/>ná nau mántrā ānuditāsa eté<br/>māyas karan páratate canāhan   </i>                   | Imperativ Präsens<br>Konjunktiv Präsens   |
| 2. | <i>kím etā vácā kṛṇavā távāhām<br/>prākramiṣam uśāsām agriyéva  <br/>púrūravaḥ púnar ástam párehi<br/>durāpanā vāta ivāhām asmi   </i>                        | Konjunktiv Aorist<br>Konjunktiv Präsens<br>Indikativ Aorist (Konstatierung)<br>Imperativ Präsens<br>Indikativ Präsens |
| 3. | <i>iṣur ná śriyá iṣudhér<br/>asanā goṣāḥ śatasā ná rāmhīh  <br/>avīre krátau ví davidyutan nó-<br/>ārá ná māyūm citayanta dhúnayaḥ   </i>                     | 8 音節 Anuṣṭubh 行 (諺)<br>Injunktiv Intensiv -Präsens<br>12 音節 Jagatī 行, Injunktiv Präsens                               |
| 4. | <i>sā vāsu dādhatī śvāsūrāya váya<br/>uṣo yádi vāṣṭy āntigṛhāt  <br/>ástam nanaḥṣe yásmiñ cākán<br/>dívā náktam śnathitá vaitaséna   </i>                     | 不規則, (副文 Indikativ Präsens)<br>不規則 (break 欠), Perfekt   |
| 5. | <i>trīh sma máhnaḥ śnathayo vaitaséna<br/>-o, tá sma mé 'vayatyai pṛṇāsi  <br/>púrūravó 'nu te ketam āyaṃ<br/>rájā me vīra tanāvās tād āsiḥ   </i>            | sma + Injunktiv Präsens<br>sma + Indikativ Präsens<br>Imperfekt (i)<br>Imperfekt (as)                                 |
| 6. | <i>yā sujūrñih śrēñih summāāpir<br/>hradécakṣur ná granthīnī caranyūh  <br/>tā añjāyo 'runāyo ná sasruḥ<br/>śriyé gāvo ná dhenávo<sup>(1)</sup>navanta   </i> | Injunktiv Präsens   |
| 7. | <i>sám asmiñ jāyamāna āsata gnā<br/>utém avaradhan nadīyāḥ svágūrtāḥ  <br/>mahé yát tvā purūravo ráñāyā-<br/>āvardhayan dasyuhátyāya devāḥ   </i>             | Imperfekt<br>Imperfekt  |
| 8. | <i>sácā yád āsu jāhatīṣu ātkam<br/>āmānuṣīṣu mānuṣo niṣéve  </i>  | Indikativ/Injunktiv Präsens   |

- āpa sma māt tarāsantī nā bhujyús*  
*tā atrasan rathaspaśō nāśśvāh ||*  
 9. *yād āsu máto amṛtāsu nispaśk*  
*sám kṣoṇībhiḥ krátubhir ná pṛñkté |*  
*tā ātāyo ná tan<sub>(a)</sub>vāh śumbhata svā*  
*āsvāso ná krīdāyo dāndaśānāh ||*  
 10. *vidyún ná yā pātantī dávidyod*  
*bhāraṅtī me āpyā kām<sub>y</sub>vāni |*  
*jāniś<sub>o</sub> apó ná<sub>y</sub>ryah sújātah*  
*praśōrvāsī tirata dīrghāma āyuh ||*  
 11. *jajñīśā itthā gopīth<sub>y</sub>vāya hī*  
*dadhātha tát purūravo ma ójah |*  
*āsāsam tvā vidúśī sāsminn áhan*  
*ná ma āśṛnoḥ kím abhūg vadāsi ||*  
 12. *kadā sūmúh pitāram jātā ichāc*  
*cakrān nāśśru vartayad vijānān |*  
*kó dámpatī sámanasā ví yūyod*  
*ādha yād agnīh śvāsūreṣu dīdayat ||*  
 13. *prāti bravāni vartāyate āśru*  
*cakrān ná krandad ādh<sub>y</sub>e śivāyai |*  
*prá tát te hinavā yāt te asmé*  
*pāreh<sub>y</sub> āstaṃ nahí mūra māpah ||*  
 14. *sudevó adyā prapāted ānāvṛt*  
*parāvátam paramāṃ gántavā u |*  
*ādhā śáyīta nirṛter upāsthé*  
*'adhaināṃ vfkā rabhasāso adyūh ||*  
 15. *purūravo má mṛthā má prá pāpto*  
*mā tvā vfkāso āśivāsa u kṣan |*  
*ná vai strāiṇāni sakhyāni santi*  
*sālāvṛkāṇāṃ hṛdayān<sub>y</sub> etā ||*  
 16. *yād virūpāścaram márt<sub>y</sub>eṣ<sub>u</sub>*  
*āvasam rátrīh śarādās cātasrah |*  
*ghṛtāsya stokām sakṛd āhna āśnām*  
*tād evédām tát<sub>r</sub>pāṇā carāmi ||*  
 17. *antarikṣapṛāṃ rājaso vimānīm*  
*ūpa śikṣām<sub>y</sub> urvāsīm vāsiṣṭhah |*  
*ūpa tvā rātīh sukṛtāsya tīṣṭhān*  
*nī vartasva hṛdayaṃ tapyate me ||*  
 18. *iti tvā devā imā āhur aida*  
*yāthem etād bhāvasi mṛtyūbandhuḥ |*  
*prajā te devān haviṣā yajāti*  
*svargā u t<sub>u</sub>vām āpi mādayāse ||*
- sma* + Imperfekt  
 unterzählig, Indikativ Präsens  
 überzählig, Injunktiv Präsens  
 unterzählig, Injunktiv Intensiv-Präsens  
 Injunktiv Aorist  
 Injunktiv Präsens  
 12 音節 Jagati 行(unterzählig), Perfekt  
 Perfekt  
 Imperfekt  
 Imperfekt, Konjunktiv Präsens  
 Konjunktiv Präsens  
 Injunktiv Präsens  
 Injunktiv Präsens  
 12 音節 Jagati 行, Konjunktiv Perfekt  
 Konjunktiv Präsens  
 不規則, Injunktiv Präsens  
 Konjunktiv Präsens  
 不規則, Imperativ Präsens, Injunktiv Aor.  
 Optativ Präsens アクセント付  
 Optativ Präsens アクセント付  
 Optativ Präsens アクセント付  
*mā* + Injunktiv Aor., *mā* + Injunktiv Aor.  
*mā* + Injunktiv Aorist  
 Indikativ Präsens  
 (副文 Imperfekt)  
 (副文 Imperfekt)  
 Imperfekt  
 Indikativ Präsens.  
 Indikativ Desiderativ-Präsens  
 Konjunktiv Präsens  
 Imperativ Präsens, Indikativ Präsens  
 Perfekt (Präsens の 価値)  
 (副文 Indikativ Präsens)  
 Konjunktiv Präsens  
 Konjunktiv Präsens

3. ヤジユルヴェーダ散文から、『マイトラヤニ― サンヒター』

ここでは、ウルヴァシーは「女神」とよばれており、神々とは兄弟関係にある仲間である。

イダーの子ブルーラヴァスは、女神ウルヴァシーを得た（結婚した）のだ。彼女から、アーユが生まれた。彼は、天界へ行く神々を追って、上っていった。彼ら（神々）は言った：「そこへ、我々神々は行くが、どこへ、この人間（マヌシュの子孫）は行くつもりだろうか」と。彼は言った：「私と同じ仲間は多いのです。彼らは私に言うでしょう、この女神の子は、母と兄弟関係にある神々 [のもと] から何を持ってきたか、と。私に何かあらしめよ（下さい）」と。彼にアグニ（火神）は [自分の] 祭儀にかなった姿（からだ）を 与えた。それを、彼は [衣服の] 前掛け [部分] の中に置き入れて運んできた。それを火鉢の中に置き入れた。それは、着生樹アシュヴァッタ（インド菩提樹）となった。火鉢であったもの、それはシャミー（アカシアの一種の堅い樹木）に。それ故、これら両者は祭式に登場する。よき生まれをもつから。

注記その他については、1. の 2) に挙げた GOTŌ, AMANO を参照されたい。

原文 Maitāyaṇī Saṁhitā I 6,12:106,1-7

*purūrāvā vā aidā urvāsīm avindata devīm. tāsya āyur ajāyata. sā devānt svargām lokān yatō (Ed. yatto) 'nūdait. tē 'bruyams. tād vayām devā imāḥ kvāyām manusyo gamiṣyātī. sō 'bravīd. bahāvo vāi me sāmānās. té mā vakṣyanti. kim ayām devyāḥ putrō devébhyo māturbhrātrébhyā āhārṣīd. āstv evā me kīmcid iti. tasmā agnir yajñiyām tanvaṁ prāyachat. tām utsaṅgē 'vadhāyāharat. tām ukhāyām āvādadhāt. sō 'śvatthā ārohō 'bhavad. yōkhā sā samī. tasmād etāu yajñāvacarāu. pūnyajanmānu hí.*

4. 『シャタパタ・ブラーフマナ』 XI 5,1,1-17

1. アブサラスであるウルヴァシーはイダーの子ブルーラヴァスを愛した。<sup>1)</sup> 彼と結婚する時に、[彼女は] 言った：「一日のうちに三度、いつでも私を籐製の棒で打ちなさい。<sup>2)</sup> [私が] 望まないときに、いつでも私に乗るがよい」。だが、君が裸のところを私が見ることのないように。<sup>3)</sup> これが私たち女たちへの接し方（礼儀）なのです」と。

1) 3. に見たヤジュルヴェーダ散文が現在語幹過去形 (Imperfekt) で語られるのに対し、文の二番目に *ha*, 文末に動詞の完了形がくる新しい “*itihāsa*” 「だったとき」スタイルで語られる。

2) 強調の Partikel として *sma* (「きっと、いつでも」) を使うのは RV に限られ、散文中に用いられる唯一の例外箇所である。対応する RV X 95,5 を意識した擬古的語法と考えられる (DELBRÜCK Ai.Synt. 501)。ただし、RV 同箇所のそれは、*sma* + Ind./Inj.(/Ipf.) Präs.による過去の繰り返しを表す別の用法である: 第 5, 8 詩節; HOFFMANN Inj. 201 参照。*hatād* は 時の指定を伴う命令に使われる *tād-Iptv.* (Iptv. II) である。ここでは、「結婚後は」という条件が含意されているものと解される(天野恭子氏の指摘, 2011年1月, による)。Iptv. II はあらゆる人称, 数, 態の形を代行する。*han* はここでは性的動作に用いられている, cf. AV VI 101,1 *yathāṅgām vardhatām śépas téna yośítam ij jahi* 「男根は身体部位に相応しく大きくなれ。それによってまさしく若い女を[おまえは]打て」, さらに, PISCHEL Vedische Studien I (1889) 84, GELDNER 同書 270 参照。

3) Cf. J. J. MEYER Weib (1915) 196. アモールとプシューケーの物語に同様のモチーフが現れることはよく知られているが、ここでは、より現実的な事情を考慮すべきかもしれない。即ち、モンゴルで、雄羊が時期はずれに交わらぬように用いられる「ふんどし」*xog* が想起される, cf. 『梅棹忠夫著作集』第 2 巻 (1990) 594f. A. 1/5  
の *BaudhŚrSū* 版, 注 7, 21 参照。

2. 彼女は彼の下に永く暮した (留まった)。更に、彼故に妊娠して (彼の子を宿して) いた。それほど永く彼の下に暮した。そこで、ガンダルヴァたちは話し合った: 「このウルヴァシーは永く人間たちの下に暮したのだ。どうしたら彼女が戻って来るか、思案せよ」と。彼女のベッドには二頭の仔羊を伴った雌羊が結び付けられていた。<sup>4)</sup> そこで、ガンダルヴァたちは一方の仔羊を奪い取った。

<sup>4)</sup> クシャノ・ササーン朝の「金羊牀」を想起させるものがある, cf. 田辺勝美『東洋文化研究所紀要』124 (1994) 76ff. *tásyai* は *śáyana-* にかかる Gen. である。f. Sg. Dat. 語尾 *-ai* が Gen., Abl. の価値を持つのは、Veda 散文の特徴の一つ (神学者の方言) で, AV, YSm 以降 *BaudhŚrSū* まで見られる, WITZEL *Dialectes dans les littératures*

Indo-Aryennes (1989) 132-139 参照。

3. 彼女は言った:「ちょうど男手(勇士)が無いときに<sup>5)</sup>、ああ(何と)、ちょうど人がいないときに、私の息子を(彼らは)連れて行く(奪い去る)」と。(彼らは)第二[の仔羊]を奪い取った。彼女は全く同様に言った。

<sup>5)</sup> *avirá iva*: *avirá-* は Bahuvrīhi 複合語が実体詞として用いられたもので、「男手のないこと・状態」を表すものと考えられるが (DELBRÜCK Ai.Synt. 116, MINARD Trois Enigm. II 282 参照), 一連の副詞的用法の存在も指摘されている (FORSSMAN Coloq.Delbr. 85-111, 特に 98)。X 95,3c には *avīre kráttau* 「男手の無い, 火急時に」とある。ŚB と RV とでは *avīra-* のアクセント位置が異なるが, ŚB の語形が Bahuvrīhi として普通の形 (AiG II-1 295 参照) であり, RV のそれは *vīrá-* のアクセント位置を避けて複合語であることを明瞭化したものと解される。*iva* はヴェーダ散文では「丁度, 当に, まさしく」の意味で用いられることが多い。SCHRAPEL *iva* (1970) をも参照のこと。

4. すると、彼が考えた:「どうしてまた、私<sup>かあつ子ら</sup>がいるのに、それがどうして男手が無い、どうして、人がいないことになろうか」と。彼は裸のまま[あとを]追って飛び出した。(彼は)衣を纏うとしたら、それはもどかしいと思った。すると、ガンダルヴァたちは電光(稲妻)を生じさせた。彼が裸のところを、あたかも日中に、のように、そのように[彼女は]見た。<sup>6)</sup>すると、彼女は見えなくなった(姿を消した)。「私は戻って来る」と[彼は思った](戻ってくるつもりだった)。「戻ってみると、彼女が]消えているのに[出あった]。<sup>7)</sup>彼は憧れに[悩んで]つぶやきつつ、クルクシェートラ(クル族の居住地)を過ぎってさまよった。—アニヤタッハ・プラクシャー(「片岸にプラクシャ[イチジクの種類]の生えた」)というのは蓮池<sup>8)</sup>である。—<sup>9)</sup>その縁を通して[彼は]さすらった。そこには、かのアプサラスたちが、鴨たちとなって<sup>10)</sup>、漂い回っていた。

<sup>6)</sup> RV 95,3cd の P の抗議のことばに対応する。

<sup>7)</sup> *ét* + Akk. 構文の由来 (*á* + *id* + 移動の定動詞の省略)と文献については, GOTŌ

Fs.Narten p.91, 神子上記念論集 857 頁参照。

<sup>8)</sup> *bisavatī-*「蓮根をもつ [池 *sarasī-*]」。BaudhŚrSū XVIII 45: 399,11 では固有名詞となっている。

<sup>9)</sup> 説明の必要がある地名を挙げるときの挿入句 (Ortsnamen-Parentese), HOFFMANN Aufs. 120ff. (特に 122, 127), 更に 76, 405 参照。

<sup>10)</sup> 冬に渡ってくる(戻ってくる)水鳥の姿に姿を変えた天女を想定している。雁が男性名詞 *hansá-* (英語 *goose*, ドイツ語 *Gans*, ギリシャ語 *k'én*, ラテン語 *ānser* などとともに, 印欧祖語男性名詞 *\*gʰans-* に遡る)であるのに対し, 鴨 *ātī-* は女性名詞である (ドイツ語 *Ente*, ラテン語 *anat-/anít-* などとともに, 印欧祖語女性名詞 *\*h<sub>2</sub>nh<sub>2</sub>tí-* に遡る)。

5. 彼と解って (気が付いて), 彼女は言った:「ここに, 私がその下に暮っていた, その人 (マヌシュの子孫, 人間) がいます」。彼女たちは言った:「彼に姿を現していきましょうよ」。「そう [しましょう]」。彼に [彼女たちは] 姿を現していた。

6. 彼女と解って, 彼は, 声を掛けた:

ひどい。妻よ。考えを [まじえた] — 生まれ, おそろしい女よ —  
交えたことばたちを交わそう, さあ。

私たちの考えていることどもが口にされずにおわれれば, これらは  
なぐさめをなさないであろう, もっと先の日に [なったとし] ても。

(RV X 95,1)

と。「さあ, 生まれ (待ってくれ)。さあ, 語り合おう」と, 彼女に, それによって言ったのである。<sup>11)</sup>

<sup>11)</sup> 議論を締め括る文では, 文の第二の要素に *evá* が用いられる。神学議論の文では, マントラまたは祭式行為の結果得られる成果を述べる事が多く, 「(他ならぬ ... によって etc.) ... ことになる」と翻訳できる。

7. 彼に, 相手は答えた:

これらはいったい, (つまり) 君のことばによって, 私が [何を] な

したらよいのです。

私は去ったのです。曙たちの中で、最初の [それ] のように。

ブルーラヴァスよ、家へと戻り去れ。

私は風のように 届きがたい [女] です。(X 95,2)

と。「私が言ったこと、それを君はなさなかつたのです。<sup>12)</sup> 私は、今となつては君には届きがたい [女] なのです。家へ戻りなさい」と、彼にそれによって言ったのである。

<sup>12)</sup> *akaros, ábravam*: 過去の事実 (*ábravam* は大過去とも) を相手に報告する現在語幹過去形 (Imperfekt) を用いている。互いに知っていることを「確認」する (Konstaterung) アオリストが用いられていないことは、U が突き放した言い方をしている、あるいは、皮肉な物言い (「君は忘れているかもしれないけれど」) をしているとも解釈できる。

8. すると、彼はうちひしがれて<sup>13)</sup> 言った:

良き神々をもつ者が、今日、戻らぬ者として身を投げる [なら]、

行つたきりの最果てへと行くために、

そうして、「破滅」(の女神) の膝の上に横たわる [なら]、

そうして、ひっさらう狼たちがその者を食らう [ならば]。(X 95,14)<sup>14)</sup>

と。「良い神をもつ [彼] は今日首を吊るか、または、身を投げるであろう。すると、当人を、狼たちか、または、犬たちが食べるであろう」と、それによって言ったのである。

<sup>13)</sup> *páridyūna* : *pari-dīv/dyū* の VAdj. 「賭けですつた・賭けですつてがっかりした」が原意。

<sup>14)</sup> 但し、アクセントに関して、RV との間にずれがある。c: RV *śáyīta* :: ŚB *śáyīta*, d: RV *adyúh* :: ŚB *adyuh* または *adyúh*。RV では、cd の定動詞はアクセントをもち、従属文 (おそらく相手の意見を期待する完結していない文) であるが、ŚB では普通の主文になっている。

9. 彼に相手が答えた :

ブルーラヴァスよ、死ぬな。身を投げるな。

そして、不吉な狼たちが君を食らうことがないように。

女たちからなる仲間関係（諸々の連帯）は存在しないのです。

ここにあるのは、ハイエナたちの心臓です。(X 95,15)

と。「それ（そんなこと）を気にかけては（思っでは）ならない。女たちからなる仲間関係（連帯）は存在しないのだ。家へ戻れ」と、当人に、それによって言ったのである。

<sup>15)</sup> ここで、「女たちの連帯関係」を言う理由については、RVの項第15詩節への注参照。

10. 私が 姿を変えて 死すべき者たちの中で活動していたとき、

四秋の間、夜を過ごしたとき、

バターオイルの滴りを、日に一度、食べていました。

それ以来というもの、ここに満足したままです。(X 95,16)

と（彼女は言った）。そこで、多くのリチ (*fc-*) をもつ者たち（ホータル祭官に属する祭官たち）は、この15の詩節 (*fc-*) からなる問答を公言している。彼女の心を（彼は）包み込んだ。

11. 彼女は言った:「ちょうど一年間経った夜に來なさい<sup>16)</sup>。そのとき、一夜を私のそばで（脇で）君は伏する（寝る）ことになります<sup>17)</sup>。生まれてここにいる [子] は、そのときに君の息子となります<sup>18)</sup>」と。彼はちょうど一年間経った夜にやっ来て。なんと、黄金でできた建物たち<sup>19)</sup>に [出くわした]<sup>20)</sup>。その時、当人一人に言った<sup>21)</sup>:「ここに入れ」と。すると、彼へと彼女を（彼らが）送ってよこした。<sup>22)</sup>

<sup>16)</sup> Iptv.II が用いられている。

<sup>17)</sup> *sayitāse* (Fut.II): *as* の Med. 形は Fut.II の構成要素として使われる時のみ現れる (Gorō 国立民族学博物館研究報告 15-4 (1990)1006 参照)。Akt. °*si* :: Med. °*se* への類推を基に形成されたものと考えられる。



18) *jātā u te 'yām tārhi putrō bhavitēti* (Fut.II): DELBRÜCK Ai.Synt. 296 は「すると、君のこの（今お腹に宿っている）息子が、生まれていることになります」と解す。

19) *hiranyavimitā-*: *vimitā-* は設計して造られる (*vi-mā*) 恒久的な建物を意味する。ソーマ祭において祭主が「再生する」のに用いられる潔斎の建物も *vimitā-* とよばれる。産屋のような特別な設備があった可能性が考えられる。

20) 上記注 7) 参照。

21) 主語は宮殿を護る門衛たち(おそらくガンダルヴァに属する)であろう。 *ékam* は「一言 (*vācas* など)」とも考えられるが、お付きの人々を置いて、P 一人に言ったものと解した。「一人っきりでいる」も可能か。

22) *tād dhāsmāi tām upaprājighyuḥ: úpa* は Akk. を支配するが、ここでは Dat. *asmāi* 「彼のために」によって、*prā-hay/hi* の直接目的語 (*tām*) との二重 Akk. (「彼の許へ彼女を」) を避けたものと思われる。

12. 彼女は言った:「ガンダルヴァたちが 君に、明朝、褒美を与えることになっています<sup>23)</sup>。それを選ぶがよい」と。「それを、私のために君が選べ」と [P はいった]。「[私は]まさしく君たちの中の一人でありたい (Präs. Konj.)、と言うのです (Fut.II)」と。彼に、翌朝、ガンダルヴァたちが褒美を与えた。彼は言った:「[私は] まさしく君たちの中の一人でありたい」と。

23) *vāraṃ dātāras* (Fut.II): *vāraṃ dā* は「欲しい物を選ぶこと (*vāra-* m.) を与える (*dā*)」、つまり、「欲しいものを選んでやる、選ぶ権利を与える、褒美を与える」。

13. 彼らは言った:「人間たち (マヌシュの子孫たち) の間には火 (アグニ) の祭りに適った (祭式の能力を備えた) 姿 (からだ) が存在しない、それによって祭式を行った後、[ひとが] 我々の中の一人になれる<sup>24)</sup> ような」と。彼に、平鉢に移し入れて、火を差し出した<sup>25)</sup>、「これによって (を用いて) 祭式を行った後、[君は] 我々の中の一人となるだろう」といって。それと童子とを取って [彼は] さすらい戻った<sup>26)</sup>。彼は原野に火を置いて、童子だけを [連れて] 村落に帰った。「私は戻って来る」と [考えて]。なんと [火は] 消えていて、火で [あった] もの、それは *Aśvattha* (の木) に、平鉢で [あ

った] もの、それは Śamī (の木) に [なっているの] に [出くわした]<sup>27)</sup>。

彼は Gandharva たちのところへ戻って来た。

<sup>24)</sup> *syāt* 「ありうる」は *bhav'bhū* 「なる」の Opt. をも担うので、こう訳した。

<sup>25)</sup> *prádaduḥ* は *pra-dā*, または, *dā* 「与える」を現在において補完する (*pra-*)*vaccha-*<sup>4)</sup> 「差し出す, 与える」 (cf. Pāṇini VII 3,78) の Perf. と解される。

<sup>26)</sup> *vraj* が生活圏 (*grāma-, loká-*) から出て, *áranya-* 「原野, 荒野」を過ぎて移動することを意味することについては, 神子上恵生記念論文 (2004) 859 参照。

<sup>27)</sup> *ét tiróbhūtam, yò 'gnir ásvatthám tám, yá sthālī śamīm tám: éd + Akk.* の構文については, 上記注 7) 参照。二つの関係代名詞は, それぞれ関係節中の述語名詞の性・数に一致している。

14. 彼らは言った: 「一年間, 四食分からなる<sup>28)</sup> 粥を調理せよ。そうしたら (*sá*) まさにこのアシュヴァッタの (から作った)<sup>29)</sup> 各 3 本の (燃え上がらせる) 焚き木に順次バターオイルを塗り付けて, 『焚き木』(という語) を含んだ, 『バターオイル』(という語) を含んだ讃歌 (リチ) たちを伴って, (火に) くべるがよい<sup>30)</sup>。それから生じることになる火, それこそがそれ (祭式用の火) となる<sup>31)</sup>」と。

<sup>28)</sup> *cātusprāśyá-* 「4 食分からなる」は, 実体詞 \**catus-prāśá-* 「\*四食分 (全体) (Zahlwortkomplexkompositum, SOMMER 複合語) をそのまま Bahuvrīhi (形容詞) として用いるやり方によらず, \**catus-prāśá-* を *Vṛddhi* + 接尾辞 *-ya-* によって派生させた形容詞 (従って, 文字通りは「四食分に足る」)。

<sup>29)</sup> 材料の Genitiv.

<sup>30)</sup> Fut. II は「一年間の粥の調理が終わったら」を含意する。祭火設置祭の準備と儀礼を予定している。

<sup>31)</sup> Fut. II *janitá* は 17 の *jajñe, jāyate* に見られる Medium 語形に属する。3 人称単数には特別な Med. は作られなかった。Fut. II *bhaviá* 「なる (ことになっている)」は 17 の Perf. *āsa* に対応する (「であることになる」と解することも可能である。

15. 彼らは言った: 「これは, まさしく, 不明瞭なのだ。<sup>32)</sup> ほかならぬアシュヴァッタ製の火鑽り棒を (君のために) 作れ。シャミーでできた火鑽り台を。

それから火が生じることになれば、それこそがそれ（祭式用の火）となる」と。

<sup>32)</sup> 「より具体的に言おう」という意味と考えられる。

16. 彼らは言った：「これは、まさしく、不明瞭なのだ。ほかならぬアシュヴァッタ製の火鑽り棒を（君のために）作れ。アシュヴァッタ製の火鑽り台を。それから火が生じることになれば、それこそがそれ（祭式用の火）となる」と。

17. 彼はほかならぬアシュヴァッタ製の火鑽り棒を（自分のために）作った。アシュヴァッタ製の火鑽り台を。それから火が生じたが、それこそがそれ（祭式用の火）であった。それをを用いて祭式を行った後、[彼は] ガンダルヴァたちの一人であった。それ故、[ひとは] ほかならぬアシュヴァッタ製の火鑽り棒を（自分のために）作るべきである。アシュヴァッタ製の火鑽り台を。それから火が生じるならば、それこそがそれ（祭式用の火）となる。それによって（を用いて）祭式を行った後、[ひとは] ガンダルヴァたちの一人となる。

*Śatapatha-Brahmana*

原文 ŚB XI 5,1

1. *urvāsi hāpsarāḥ | purūrávasam aiḍám cakame. táṃ ha vindámānovāca. triḥ sma máhno vaiśaséna daṇḍéna hatād. akāmām sma mā nīpadyāśai. mò sma tvā nagnám darśam. eṣá vai na strīṇám upacārā íti. ||*

2. *sá hāsmiñ jyóg<sup>1)</sup> uvāsa. | ápi hāsmād garbhīny āsa. távajjyog ghāsminn uvāsa. táto ha gandharvāḥ sámūdire. jyóg vá iyám urvāsi manusyēśv avātsīd. úpajānīta yátheyám púnar āgāched íti. tásyai hávir dvyūraṇā śáyana úpabaddhāsa. táto ha gandharvā anyatarám úraṇam prámethuh. ||*

<sup>1)</sup> Ed. WEBER hāsmín yóg.

3. *sá hovāca. | ávirā iva bata me 'janá iva putráñ harantīti. dviṭṭyam prámethuh. sá ha táthaičovāca. ||*

4. *átha háyam iḡśám cakre. | kathám nú tát avīram kathám ajanám syād yátrāhám syám íti. sá nagná evānūtpapāta. cirám tán mene yád vásaḥ paryádhasyata. táto ha gandharvā vidyútam janayám cakrus. táṃ yáthā dívaivám nagnám dadarśa. táto haivēyám tiró babhūva. púnar áimīty. ét tiróbhūtām. sá ādhyá jalpan kuruksetráñ samáyā cacār. ānyatāḥplakṣéti bisavaṭi. tásyai hādhyanténa vavrāja. tát dha tá apsarása átáyo bhūtva páripuphuvire. ||*

5. *tám heyám jñātvovāca. | ayám vai sá manusyò yásminn ahám ávátsam íti. tá hocus.*

tásmai vá āvir asāméti. táthéti. tásmāi hāvīr āsuḥ. ||

6. *tām hāyām jñātvābhiparōvāda. | hayé jāye mānasā tīṣṭha ghore vácānsi misrā kṛṇavāvahai nú | ná nau mántrā ānuditāsa eté máyas karan páratate canāhann ity. úpa nú rama. sám nú vadāvahā itī haivàinām tād uvāca. ||*

7. *tām hētarā prātyuvāca. | kim etā vācā kṛṇavā tāvāhām. prākramiṣam uśāsām agriyēva<sup>2)</sup> | pūrūravah<sup>3)</sup> púnar āstam párehi. durāpā vā vāta ivāhām asmñti. ná vai tvām tād akaror yād ahām ābravaṃ. durāpā vā ahām tvāyaitārhy asmi. púnar grhān ihñti haivàinām tād uvāca. ||* <sup>2)</sup> ŚBのSandhi形 (RV agriyēva). <sup>3)</sup> Ed. WEBER *purūravah*.

8. *ātha hāyām páridyūna uvāca. | sudevó adyá prapáted ānāvṛt parāvátam paramām gántavā u | ādhā śáyīta<sup>4)</sup> nírṭter upasithé. 'dhainam vfkā rabhasāso adyur.<sup>5)</sup> itī. sudevó 'dyóv vā badhñta. prá vā patet. tād enam vfkā vā śvāno vādyur itī haivā tād uvāca |* <sup>4)</sup> RV はśáyīta。 <sup>5)</sup> RV にある *adyur* の読みも可能。

9. *tām hētarā prātyuvāca. | pūrūravo má mṛthā má prápapto. má tvā vfkāso áśivāsa u kṣan | ná vai strāināni sakhyāni santi. sālāvṛkānān hḥdayāny etéti. mañtād<sup>6)</sup> ādṛthā. ná vai strāinam sakhyām asti. púnar grhān ihñti haivàinām tād uvāca. |* <sup>6)</sup> Ed. WEBER のアクセント表記に誤りあり。

10. *yād virūpācaram | mártyeṣv, ávasam rátrīḥ śarādas cātarsah | ghṛtāsya stokām sakḥd āhna āśnām. tād evēdām tātpānā carāñti. tād etād uktraprayuktām pañcadaśarcām bahvṛcāḥ práhus. tásyai ha hḥdayam āvyayām cakāra. ||*

11. *sā hovāca. | saṃvatsaratamñn rátrim āgachatāt. tán ma ékam rátrim ante śayitāse. jātā u te 'yam tárhi putró bhavitéti. sā ha saṃvatsaratamñn rátrim ājagām<sub>a</sub>éd dhiranyavimitāni. táto hainam ékam ūcur. etād prāpadyasvēti. tād dhāsmāi tām upaprājighyuh. ||*

12. *sā hovāca. | gandharvā vai te prātár váram dātāras. tām vṛñāsā itī. tām vai me tvām evā vṛñīsvēti. yuṣmākam evāiko<sup>6)</sup> 'sāñti brūtād itī. tásmāi ha prātár gandharvā váram daduh. sā hovāca. yuṣmākam evāiko 'sāñti. ||*

13. *té hocuh. | ná vai sā manusyēṣv agnér yajñīyā tanūr asti yāyēṣtvāsmākam ékaḥ syād itī. tásmāi ha sthālyām ōpyāgnīm prádadur. anēneṣtvāsmākam éko bhaviṣyasñti. tām ca ha kumārām cādāyāvavrāja. só 'raṇya evāgnīm nidhāya kumārēñaivá grāmam éyāya. púnar dimñty. ét tiróbhūtam yò 'gnír āsvatthām tām yā sthālī samññ tām. sā ha púnar gandharvān éyāya. ||* <sup>7)</sup> Ed. WEBER のアクセント表記に誤りあり。

14. *té hocuh. | saṃvatsarām cātuṣprāsyaṃ odanam paca. sā etāsyaivāsvatthāsya tisrāstisrah samidho ghṛtēnānvājya samidvatībhīr ghṛtāvatibhīr rēgbhīr abhyādhattāt. sā yās táto 'gnír janitā sā evā sā bhavitéti. ||*

15. *té hocuh. | paró'kṣam iva vā etād. āsvatthīm evōttarāraññim kuruṣva. samñmāyñm adharāraññim. sā yās táto 'gnír janitā sā evā sā bhavitéti. ||*

16. *té hocuh. | paró'ksam iva vā etād. āsvatthīm evōttarāraññim kuruṣvāsvatthīm adharāraññim. sā yās táto 'gnír janitā sā evā sā bhavitéti. ||*

17. *sā āsvatthīm evōttarāraññim cakre<sup>7)</sup>. | āsvatthīm adharāraññim. sā yās táto 'gnír jajñé sā evā sā āsa. tēneṣtvā gandharvāñām éka āsa. tásmād āsvatthīm evōttarāraññim kurvītāsvatthīm adharāraññim. sā yās táto 'gnír jāyate sā evā sā bhavati. tēneṣtvā gandharvāñām éko bhavati. ||* <sup>7)</sup> *cakre* の読みも可能。

CALAND (II 396 n.1) は、この部分について写本の乱れを強調し、異読修正の全てを挙げない旨記している。物語は ŚB 同様、*itihāsa*スタイル (3. ŚB の注 1 参照) で語られる。

44: 396,1 昔、イダーの子、プルーラヴァス[という]美男の<sup>1)</sup>王があった。彼をアプサラス<sup>2)</sup>のウルヴァシーが慕っていた。彼に、一年間、恋して付きまとった。このように、以前の人々<sup>3)</sup>は努力したものだだったのだ。それを[彼女は]永すぎると思った。走っている(走らせている?)<sup>4)</sup>彼の車の前に、穴(亀裂)を現出させた(見えさせた)。それを見て、王は降りた。それ(穴)は、降りると、見えなかった。そこで再び乗り込んだ。それは、乗り込むと、見えた。彼は御者に尋ねた:「御者よ、何が見えるか」と。「君が、殿」と[御者は]言った、「車が、馬たちが、道が」と。彼は考えた:「私は狂っている(頭がおかしい)どうかしている)ようだな」と。彼に声が話しかけた:「君は狂っていないのだ。私が君のもとにこの穴(亀裂)を出現させたのだ」と。「それなら君は誰か<sup>5)</sup>」と。「私はアプサラスのウルヴァシーだ」と言った、「その私は君を一年間恋して付きまとったのだ。そういう私を妻として得よ」と。<sup>たかし</sup>  
「神々は<sup>6)</sup>、あなた<sup>7)</sup>、扱いにくいものだ」と[彼は]言った、「君にはどう接したらよいか(何が君に対する接し方か)」と。「私に100人の侍者がるように。毎日各100個のサルピス<sup>7a)</sup>の壺が私のもとへ来るように。私はそれを糧とする者であるように。君が裸のところを私が見ることのないように」と。「それは全て、あなた様、たやすいことです」と[彼は]言った、「だがまた、どのように[したら]妻が夫の裸のところを見ないか」と。「下着<sup>8)</sup>を身につけているように」と[彼女は]言った、「裸でなく、なれ」と。

<sup>1)</sup> この物語には恋愛に基づく子孫の継続・繁栄の起源についての因縁譚という性格がある。*kalyāṇa-* は、おそらく「見かけのよい」意味であろう、cf. 『ブリグの物語』 ŚB, JB に見られる *kalyāṇī-* 「美しい女」、*atikalyāṇī-* 「美しすぎる女」、JB *kalyāṇatamaṃ rūpāṇām* (cf. FORSSMAN MSS 56, 1996, 50f., 56ff.; Apālā, Cyavana 仙の物語の Cyavana, Aśvin などについて用いられている)。*kalyāṇa-*は後には「良い(good)」の意味で使われるように思われる、例えば、MBhār XII 93,11。

- 2) Textにはアプサラー*apsarā*とある。*apsaras-*の単数主格形は*apsarās*であるが、その、母音の前に立ったときの形から、女性名詞 *apsarā-* を実際に用いるに至っていたと考えられる。
- 3) 具体的にはウルヴァシーを指すが、「以前の人々」*pūrve* は男性複数形によって代表されている。Cf. 注 5, 6 参照。
- 4) ブルーラヴァスが自ら走っているのではなく、車を走らせている (*drive*) のであるから、*dhāvatas* ではなく、Kaus. の *dhāvayatas* が求められるところである (cf. BODEWITZ III 16, 1975, 81–95)。
- 5) *atha kas* (m.Nom.Sg.) *tvam* : 相手は *Urvaśī* (女) であるが、*Purūravas* にとってまだ正体不明の声の主には男性形が用いられている。Cf. 注 3, 6。
- 6) 神々一般を男性形 *devāḥ* (m.Nom.Pl.) によって代表させている。Cf. 注 3, 5。
- 7) *bhavati* (f.Vok.Sg.) : 敬語形。以下に現れる、より古い本来の形 (*bhagavati*) に注意。
- 7a) 乳製品の一つ。西村直子「Pāli 聖典における乳加工関連の定型句について — Rājasūya 祭の *Mitra* と *Bṛhaspati* に対する献供との比較」『文化』 64-1 (2000) 1–22 参照。
- 8) *antarvāsa-* : ここでは雄羊の避妊用パンツが示唆されているとも考えられる。
3. ŚB 版, 注 3) 参照。

397,4 [王は] 下着を身につけて、彼女とともに暮した。彼女は生まれるたび毎に息子たち (子供たち) を捨てたものだった<sup>9)</sup>。彼女に王は言った：「私たち人間 (マヌシュの子孫) は、あなた、息子を欲しがります。だが君は、生まれるたび毎に捨ててしまう」と。彼女は言った：「[彼らは] はかない者たちとなります<sup>10)</sup>、他の者たちは寿命が尽きています。重ねて、好ましい事<sup>11)</sup>を為し合いましょう」と。彼女は (?) アーユとアマーヴァスとを生んだ。 747  
彼女は言った：「この両者を (君たちは) 養え。 (両者は) 寿命を全うするであろう」と。 28

<sup>9)</sup> *apa-vyadh* 「抛り出す」: *VādhAnvākh* 1,1 では *parā-as* 「[生まれた子を] 捨てる・捨て子にする」が使われている (cf. HOFFMANN, Aufs. 431 n.29).

<sup>10)</sup> 「一夜を全うするに過ぎない(?)」 *paryavetarātrayāḥ*: *pary-ava-ay/i* の VAj. +

*rātri-*「夜」による所有複合語 (*Bahuvrīhi*) 「(その者の)一夜が過ぎ去った」。  
*VādhAnvākh I 2 eddhāhnaḥ* 参照。

<sup>11)</sup> *priya-* の語は, *BaudhŚrSū*, *VādhAnvākh* 両 Version を通じてテーマとなっている。ここでは, 直接的には「好ましい事, 愛 [し合う] こと, 恋愛」(*das Liebe, die Liebe, das Lieben*) を意味すると解される。「お互いを好ましい者としましょう」, つまり, 「愛しあいましょう」とも考えられる。

397,9 アーユは東へ向かってさまよった (家を出た)。彼には, この, クル (*Kuru*) とパンチャーラ (*Pañcāla*) の人々, カーシ (*Kāśi*) とヴィデーハ (*Videha*) の人々, というのが属する。これ <sup>12)</sup> はアーユ <sup>13)</sup> の遍歴の跡 (植民活動) である。アマーヴァス <sup>14)</sup> は西へ向かって [さまよった]。彼には, この, ガンダーリ (*Gandhāri*) の人々, スパルシュ (*Sparśu*)<sup>15)</sup> の人々, アラーッタ (*Arāṭṭa*) の人々, というのが属する。これはアマーヴァスの (遍歴の跡) である。

<sup>12)</sup> *etat* 「これ」は, 「*Kuru* と *Pañcāla* の人々」と「*Kāśi* と *Videha* の人々」のこと。代名詞の主語が, 述語名詞である *pravṛājam* n.Nom.Sg. の性・数に一致する現象である。

<sup>13)</sup> *Āyu* の語によって, 形容詞「活動的な」が意図されていると考えられる。

<sup>14)</sup> *Amāvasu* は「家に財・ものを持つ」を意味し, 西方, つまりインダス流域に留まった「定住者」たちを意味すると考えられる。

<sup>15)</sup> <sup>+</sup>*Parśu* のことか。Text にある *gāndhāraya sparśo* は, 元々 \**gāndhārayas parśo* を意図していたと考えられる, cf. WITZEL Fs. Eggermont (1987) 201ff.。その場合, 何らかの理由によって, 無声閉鎖音の前の *-s* が *Visarga (-h)* への変化によって明瞭化される過程を誤って免れたものと判断される。*pārśu-* は肋骨 (の一本) を意味し, ペルシャの古名 *Pārśa* < \**pārśya-* 「脇から生まれた者」(ヴェーダ語の *pārśvá-* に等しい) を想起させる。RV X 86,23 (*Pārśu* という名のマヌの娘が一度に 20 人を生んだ), IV 18,2 (脇腹からのインドラの誕生) も思い合わせられる。

45 : 397,13 ところで, 彼女 (ウルヴァシー) には, この, アプサラスのプールヴァチッティが妹 (または, 姉) となっていた。彼女は考えた: 「永く私

の姉（妹）は人間たち（マヌシュの子孫たち）の間に暮したことになる。そうだ、彼女のところへ出向くとしよう」と。彼女とは、来てみはしたが、出会いが得られなかった。ところで、彼女には、跪いている<sup>16)</sup>羊の群れがあった。以前の第一夫人の姿はこのように<sup>17)</sup>なったものだったのだ。そこで<sup>18)</sup> [彼女は] (雄) 狼の姿をして (に姿を変えて) 奪い取ろうと目論んだ。ところで、彼女の椅子の脚 (の一つ) に、(まだ) 乳を飲んでいいる仔羊が結び付けられてあった。それを彼女は奪い取った。それが奪い去られつつあるとき、 [ウルヴァシーは] 叫んだ: 「この、卑怯者の子が」と。それを聞いて王は跳び上がった。彼女に追いついた。彼女に (攻撃しようと) 迫った。彼女は雌マングースとなって、彼に迫りかえした。彼の下着を [彼女は] 引きながした。その上で、彼女は電光を生じさせた。彼が裸でいるのを、彼女 (ウルヴァシー) は電光の下で目にとめた。ところで、王は彼女たちの下へ帰ってきた、「組み敷いてやったのだ、私は、仔羊を奪う奴 (女) を、打ち負かされることなく。」 [私は] いまやまさしく組み敷いてやったぞ」と (言いながら)。 「私は立ち去り戻ることになります。」 「何か起きたのか。」 「私は君が裸のところをみました」と (ウルヴァシーは) 言った。

<sup>16)</sup> *upasthā-pad-*: 「(自分の) 下腹部に脚をつけた (跪いた)」、 「彼女のお腹にぴったりと寄り添った」、 「ぴったりと寄り添って」などの解釈が考えられる。

<sup>17)</sup> *mahiṣī-* は文字通りには「より大きい」の女性名詞であり、「第一婦人」と「雌水牛」を意味する。「水牛でなく羊に」が意図されているとも考えられる。

<sup>18)</sup> あるいは、「その群れから」。

398,11 彼女が出て行くと、[王は] 愛 (愛するもの) の (い) ないこと (cf. 注 11) にうちひしがれて、悩み続けていた。彼にアンギラス族のブリハスパティが言った: 「そうだ、君にシャダ (*śada-* 「減少」) という名の一日間のソーマ祭) を以って祭式を行ってやろう。[彼女を] 手に入れさせて、再び [君を] 元気にしてやろう」と。彼にアンギラス族のブリハスパティはシャダを以って祭式を行わせた。彼女 (ウルヴァシー) に (プルーラヴァスは) まさ



しく最後の沐浴から上がって来た後、出会った。彼女に兩息子は向かって行って、言った：「君の行く先があるここ（自分たちの家）へ、私たちを連れてゆけ<sup>19)</sup>」。私たちは君たち二人のために力になれる。（君は）父を苦しめたよ」と。彼女は言った：「おまえたちに、息子たちよ、子をつくってやる。そこで私は三夜だけここで過ごそう、婆羅門（プリハスパティ）のことばが無意味にならないように<sup>20)</sup>」と。（プルーラヴァスは）彼女とともに三夜だけ過ごした、下着を着けて。彼女に〔彼の〕精液を注いだ。彼女は言った：「これはどうしたらよいだろう」と。「どうって、今か?」と王は答えた。彼女は言った：「新しい壺を持ってこい」と。その中に〔彼女は〕それを出して注いだ。/4 さて、一クルクシェートラにビサヴァティ（「蓮根をもつ」、~~3.~~ ŚB 版、注 8 参照）という名の蓮池たちがある。それらの中に、北寄りにスヴァルナサヴァニー（Suvārnasavanī「黄金を生み出す」）がある。— その中にそれを埋め込んだ。<sup>21)</sup> そこにアシュヴァッタが、シャミーに包まれて、生じた。精液からアシュヴァッタが、置き場所からシャミーが。これ（以上）がまさしく「シャミーを母胎とする<sup>22)</sup>」〔火きり棒用のアシュヴァッタ〕の創造である。これが因縁である。

<sup>19)</sup> つまり、「一緒に家へかえろよ」。

<sup>20)</sup> 三夜過ごすということが何らかの法的効力を示唆しているものと思われる。

<sup>21)</sup> RVにおける Vasiṣṭha の誕生、また MBhārにおける同種の話（JAMISON Ravenous Hyenas, 1991, p.235ff. 参照）。予定外の時・所で生まれた（羊の）子の応急処置か、埋葬などの風習が背景にありはしないだろうか。~~3.~~ ŚB 版、注 3 参照。

<sup>22)</sup> 「シャミーを母胎とする」、つまり、シャミーを着生宿とするアシュヴァッタの木。 → ~~4.~~ TS

400,3 そこで、〔ヴェーダの文: TS I 7,1,3<sup>p</sup>〕が適用される：《全〔祭式〕を伴って神々は天界に行ったのだ》という。<sup>23)</sup> そこでこの際<sup>24)</sup>、祭式が神々のもとから人間たち（マヌシュの子孫たち）へと、降りて戻ってきたときには、（必ず）ほかならぬアシュヴァッタへと、降りて戻ってきた<sup>25)</sup>。〔人々は〕

それから（それを材料に）[上下の] 火鑽り木を作った、「これがその（神々のもとから戻って来た）祭式（そのもの）なのだ」と[考えて]。しかも、周知のように、アシュヴァッタでありさえすれば、それはシャミーを母胎とする [アシュヴァッタ] である（と見なされる）。そこで、《おまえはウルヴァシーだ。おまえはアーユだ。[おまえは] プルーラヴァスだ》と [アドヴァリユ祭官が] 言う（ヤジュスを唱える）ときには、これによって、ほかならぬ彼ら親子<sup>26)</sup> の名たちを口にしていることになる。しかも、共通性（三者の一体性）を、この際（ヤジュスを唱える場合）慮るべきである。

<sup>23)</sup> *BaudhŚrSū sarveṇa vai devāḥ suvargaṃ lokam āyan*: TS I 7,1,3<sup>p</sup> *sārveṇa vai yajñéna devāḥ suvargaṃ lokam āyan* を基にした議論。火鑽り棒にアシュヴァッタを用いる根拠を語る、一種の祭式哲学（ミーマーンサー）。*BaudhŚrSū* では、「祭式」*yajñéna* の語が欠けている。恐らく話のテーマである語を敢えて忌避して示したものと考えられる（すぐ後に当の語が使われていることに注意）。

<sup>24)</sup> *etat* 「この際」は、敢えて引用しないヴェーダ本文の主題である「祭式に関して」を意味すると考えられる。

<sup>25)</sup> 倒立した世界樹の観念が伺える。

<sup>26)</sup> *pitāputrānām* 「父たちと息子／父と息子たちの」：前半要素 *pitā*- 自体が elliptischer Dual (DELBRÜCK Ai.Synt. 98) として「父たち」、つまり「父と母」を表しているか、或いは「父と息子たち」という言葉によって、母も含めた「親子全体」を表す elliptischer Plural (DELBRÜCK Ai.Synt. 102) と解釈される。

400,8 彼女が出て行くと、またもや [王は]、愛（愛するもの）の（い）ないこと（cf. 注 11）にうちひしがれて、悩み続けていた。彼にアングラス族のブリハスパティが言った：「そうだ。君にアウパシャダ (*aupaśadaśada*)<sup>(15)</sup> 「増加に関する」という名の一日間のソーマ祭）を以って祭式を行ってやろう。君のまさにその愛（愛するもの）の（い）ないこと（状態）は解消することになるのだ」と。彼にアングラス族のブリハスパティはアウパシャダを以って祭式を行わせた。すると、彼の愛（愛するもの）の（い）ないこと（状態）を [ブリハスパティは] 解消させたのだ。その両者（398,2 以下のシャダと今

述べたアウパシャダと)がこの(今知られている、現に行われている)プルーヴァスに由来するという名のシャダとアウパシャダと<sup>27)</sup>なのだ。もしひとが財産を確保したいならば、そのひとにシャダを以って祭式を行ってやるべきである。その(ための)バヒシュパヴァマーナ<sup>28)</sup>は10[詩節(リチ)]に基づく。1[詩節]ずつ増えてゆく、21まで<sup>29)</sup>。まさしくここにおいて(この世で)[彼は]勝ち得る<sup>30)</sup>。次に、愛(愛するもの)の(い)無いことを解消させたい者、そのひとにはアウパシャダを以って祭式を行ってやるべきである。そのバヒシュパヴァマーナは21[詩節]に基づく。1[詩節]ずつ減ってゆく、10まで<sup>31)</sup>。

<sup>27)</sup> 両祭式については、KRICK *Agnyādheya* 212f. n.533, 217 n.544, 同所の挙げる JB 参照。

<sup>28)</sup> 朝のソーマ搾り用の詠唱 (*stotra-*)のうち、屋外で行われる最初の一組。

<sup>29)</sup> 朝の詠唱 (*stotra-*)には10-11-12-13-14詩節に基づくストーマ (*stoma-*, 詩節の組み合わせ)が用いられ、昼は15-16-17-18-19、晩は20-21。

<sup>30)</sup> \**sunoti*「[[ソーマを]搾り出す」→\**sanoti*「勝ち得る」。GOTO 国立民族学博物館研究報告 16-3 (1997) 1034 n.186, 188。

<sup>31)</sup> ストーマの数は、21... 17, 16... 12, 11-10。

401,3 次に、プラジャーパティ(子孫の主)に由来する(属する)、という名のシャダとアウパシャダとがある。そのバヒシュパヴァマーナは3[詩節]に基づく。3[詩節]ずつ増えてゆく、36まで。<sup>32)</sup> (*Aupaśada* の)バヒシュパヴァマーナは36[詩節]<sup>33)</sup>に基づく。3[詩節]ずつ減ってゆく、3まで。

<sup>34)</sup>

<sup>32)</sup> ストーマの数は、3... 15, 18... 30, 33-36。

<sup>33)</sup> *ṣaṭtrīṃśatsu: ṣaṭtrīṃśat*「36」は、前文 *ā ṣaṭtrīṃśataḥ*「36まで」では単数で活用しているが、ここでは異例の複数形。以下の *aṣṭācatvāriṃśat*にも同様の現象が見られる(これに対し、前出の *ekaviṃśati*「21」は2度とも単数で現れる)。書かれていない「詞節 (*ṛkṣu*)」と同格の数詞が形容詞的に用いられ、*ṛkṣu*と同様の活用を取ったものと考えられる。

34) ストーマの数は、36...24, 21...9, 6-3。

401,6 次に、ニドウルウヴァの子孫カシュヤパのシャダとアウパシャダとがある。そのバヒシュパヴァーマーナは4 [詩節] に基づく。4 [詩節] ずつ増えてゆく、48まで。<sup>35)</sup> (アウパシャダの) バヒシュパヴァーマーナは48 [詩節]<sup>36)</sup> に基づく。4 [詩節] ずつ減ってゆく、4まで。<sup>37)</sup>

35) 4...20, 24...40, 44-48。

36) 注33参照。

37) ストーマの数は、48...32, 28...26, 8-4

*Bandhāyama-Śrautasūtra*

原文 XVIII 44:396,1-

*purūravā ha purā aiḍo rājā kalyāna āsa. tam* <sup>[2]</sup>*horvaśy apsarābhidadhyau. tam saṃvatsaram kāmāyamānānucacār<sub>a</sub>. -aivam ha* <sup>[3]</sup>*sma vai pūrve 'bhiśrāmyanti. tad dhātīciraṃ mene. tasya ha dhāvataḥ* <sup>[1]</sup> <sup>[4]</sup>*puro ratham kartam darśayām āsa. tam ha dṛṣṭvā rājāvatasthau. tam* <sup>[5]</sup>*hāvasthāya na dadarś<sub>a</sub>. -ātho ha punar ātasthau. tam hāsthāyaiva dadarśa. <sup>[6]</sup>sa ha sārathim papraccha. sārathe kiṃ paśyaṣṭi. tvam bhagava iti* <sup>[7]</sup>*hovāca ratham aśvān panthānam iti. sa hekṣām cakre. dṛpyāmi vai* <sup>[8]</sup>*kileti. tam ha vāg abhyuvāca. na vai dṛpyasy aham vai* <sup>+</sup>*tvayi tam* <sup>[2]</sup>*kartam adīṣam iti. atha kas tvam ity. aham urvaśy apsarēti hovāca. sā tvā* <sup>[9]</sup>*saṃvatsaram kāmāyamānānvacarīṣam. tāṃ mā jāyām vindasveti. <sup>[10]</sup>durupacārā ha vai bhavati devā iti* <sup>[3]</sup>*hovāca. kā ta upa* <sup>[11]</sup>*caryeti. śataṃ mamopasadaḥ syuḥ. śataṃ-śataṃ mā sarpiśkumbhā* <sup>[397,1]</sup>*aharahaḥ āgaccheyus. tadāśanā syām. na tvā nagnaṃ paśyeyam iti. <sup>[2]</sup>sarvam evaitad bhagavati sukaram iti hovāca. kathā tv api jāyā* <sup>[3]</sup>*patim nagnaṃ na paśyaṣṭi. antarvāsam vasūthā iti hovācānagno* <sup>[4]</sup>*bhaveti. |* *tayā sahovāsāntarvāsam vasānaḥ. sā ha sma jātā* <sup>[5]</sup>*ñjātān eva putrān apavidhyati. tāṃ ha rājovāca. putrakāmā ha* <sup>[6]</sup>*vai bhagavati vayaṃ manuṣyāḥ smo. jātāñjātān u tvam apavidhyasīti. <sup>[7]</sup>sā hovāca paryavetarātrayo bhavanti kṣiṇā-yuṣo 'nye. bhūyaḥ* <sup>[8]</sup>*priyaṃ karavāvahā iti. sāyūṃ* <sup>[4]</sup>*cāmāvasuṃ ca janayām cakāra. <sup>[9]</sup>sā hovācemaṃ bibhṛtemaṃ sarvam āyur eśyata iti. |* *prān āyūḥ* <sup>[10]</sup>*pravavrāja. tasyaite kurupañcālāḥ kāsividehā ity etad āyavaṃ* <sup>[11]</sup>*pravrājāṃ. praṭyañ amāvasus. tasyaite gāndhārāya sparśavo* <sup>[12]</sup>*ity etad amāvasavam. ||44||*

<sup>1)</sup> *dhāvavyatas* が期待されるどころ。<sup>2)</sup> “*tvayitam* or *tvayitama*” MSS.” に基づき訂正 (ICKLER KZ 90, 1976, 76), CALAND Ed. *tvām etaṃ*。<sup>3)</sup> “Thus L U Be 7; *bhavaṃti devā iti* B Be (pr.m.); *bhagavati devīti* Be (sec.m.)”. <sup>4)</sup> “*prāyu*” Be (sec.m.)”。

XVIII 45:397,13-

*atho hasyā eṣā pūrvacittir apsarā svasā babhūva. sā* <sup>[14]</sup>*hekṣām cakre. jyog vai me svasā manuṣyeṣv avātsīd. dhantainām acchāyā* <sup>[398,1]</sup>*nīti. tayā sahāgatyaiva saṃgamaṃ na lebhe. 'tho hāsya* <sup>[2]</sup>*aviyūtham upasthāpad ās<sub>a</sub>. -aivam ha sma vai pūrvā-*

sām mahiṣīṅām rūpaṃ<sup>[3]</sup> bhavati. tad vṛkarūpaṃ kṛtvā pramāthaṃ cikāy<sub>a</sub>. -ātho hāsyaṃ uraṅaḥ<sup>[4]</sup> kṣīrapa āsandipāde baddha āsa. tam sā pramamātha. tasmīn hri<sup>[5]</sup> yamāne ruruve 'yam avīraja iti. tac chrutvā rājotpapāta. <sup>[6]</sup>tām abhyānaśa<sup>5)</sup> tām abhyupeyāya. tam sā nakulī bhūtvā<sup>[7]</sup> pratyupeyāya. tasya hāntarvāsam avalulop<sub>a</sub>. -ātha ha sā vidyutaṃ<sup>[8]</sup> janayām cakāra<sup>6)</sup>. tam sā vidyuti nagnam anucakhyāv. atho ha<sup>[9]</sup> rājājagāmsv. āruham vā aham ajīta uruṇamatyasāruhamhi<sup>[10]</sup> nūnam iti.<sup>7)</sup> praty ahaṃ prajahiṣyāmi. kiṃ vyabhūd iti. nagnaṃ<sup>[11]</sup> tvādarśam iti hovāca.

† tasyām pravrajitāyām aprīyavidhah<sup>[399,1]</sup> śocamś cacāra. tam hovāca bṛhaspatir āngiraso. hanta tvā<sup>[2]</sup> śadena yājayiṣyāmy. āpayi tvā ('āpayitvā) punar jinviṣyāmi. tam<sup>[3]</sup> śadena bṛhaspatir āngiraso yājayām cakāra. tām hāvabhṛthā<sup>[4]</sup> d evodetya pratidadarśa. tām ha putrau pratīyocatur. iha nau naya yatra te gatir. balīnau vām pītaram aśūśuca<sup>8)</sup> iti. sā hovāca. <sup>[6]</sup>saṃ vām putrakau janeya. sāham iha tisra eva rātrīr vatsyāmi no<sup>[7]</sup> brāhmaṇasya vaco mogham asaḍ iti. tayā saha tisra eva<sup>[8]</sup> rātrīr uvāsāntarvāsam vasānas. tasyām retah siṣice. sā hovāca<sup>[9]</sup> katham idam syād iti. katham hi nūnā3m iti rājā pratyuvāca. <sup>[10]</sup>sā hovāca navām kumbhūm āharetī. tasyām enan niḥśiṣec<sub>a</sub>. -ātha ha — <sup>[11]</sup>kurukṣetre bisavatya nāma puṣkari-nyas. tāsām uttarārdhyā suvarna<sup>[400,1]</sup> savanī. — tasyām enan nicakhāna. tad aśvattho jāñhe śamyā parivrto. <sup>[2]</sup>retaso 'śvattha āśayāc chamy. eṣaiva śamī-garbhasya sṛṣṭir. etan nidāna<sup>[3]</sup>m.

† atha vai bhavati sarveṇa<sup>9)</sup> vai devāḥ suvargaṃ lokam āyann iti. <sup>[4]</sup>sa yatra haitad yajño devebhyo 'dhi manuṣyān praty avarurohāśvattham<sup>[5]</sup> haiva tat praty avaruroha. tasyāraṇī cakrīre 'yam vāva sa yajña<sup>[6]</sup> ity. atho khalu ya eva kaś cāśvatthah sa śamīgarbhah. sa yad ā<sup>[7]</sup> horvaśy asy āyur asi purūravā ity eteṣāṃ evaitat pitāputrāṅām nāmāni<sup>[8]</sup> gṛhṇāti. atho sāmānyam evaitad ūheta<sup>10)</sup>.

† tasyām pravrajitāyām punar evā<sup>[9]</sup> priyavidhah śocamś cacāra. tam hovāca bṛhaspatir āngiraso. <sup>[10]</sup>hanta tvaupaśadena yājayiṣyāmi. vi vai te 'priyam evaiṣy-yaṭīti. <sup>[11]</sup>tam aupaśadena bṛhaspatir āngiraso yājayām cakāra. tato vai <sup>[12]</sup>tas-yāpriyam vinināya. tau ha vā etau paurūravasau nāma <sup>[13]</sup>śadaupaśadau. sa yo vittam siśādhayīset tam śadena yājayet. tasya <sup>[401,1]</sup>daśasu bahiṣpavamāna. ekai-kopāśīyata aikaviṃśatyai<sup>11)</sup> sunoti<sup>[2]</sup> haiv<sub>a</sub>. ātha<sup>12)</sup> yo 'priyam vininīset tam aupaśadena yājayet. tasyaika<sup>[3]</sup> viṃśatyām bahiṣpavamāna. ekaikāvaśīyata ā daśabhyo.

† tha<sup>[4]</sup> prājāpatyau nāma śadaupaśadau. tasya tiṣṭṣu bahiṣpavamānas. tisra-<sup>[5]</sup> tisra upaśīyanta ā ṣaṭtrimśataḥ. ṣaṭtrimśatsu bahiṣpava<sup>[6]</sup> mānas. tistrastis-ro 'vaśīyanta ā tiṣṭṣbhyo. — tha naidhruvasya<sup>[7]</sup> kaśyapasya śadaupaśadau. tasya catasṣṣu bahiṣpavamānaś. catasra<sup>[8]</sup> ścatasra upaśīyanta āṣṭācatvāriṃśa-to. 'ṣṭācatvāriṃśatsu<sup>[9]</sup> bahiṣpavamānaś. catasraścatasro 'vaśīyanta ā catasṭbhyah ||45||

<sup>5)</sup> “bhyānarasa MSS.”. おそらく \*abhy-ānaśa. <sup>6)</sup> “Thus L Be (sec.m.); janayāmāsa the other MSS.” āsa を用いた periphr. Perf. については, cf. 396,4 darśayām āsa. <sup>7)</sup> “These corrupted words without any var[ious]. r[eadings]. in all MSS.” <sup>8)</sup> “Thus Be (sec.m., only °śūśuca); \*balicaināvṣīpītam śūśūca or \*balicaināmapīta” the other MSS.” <sup>9)</sup> “cp. TS., I.7.1.2.”. 正しくは 1.7.1.3. <sup>10)</sup> “Thus L; sāmānyamevaitiūhate Be (sec.m.); \*mevaiḥya ūhate the other MSS.” <sup>11)</sup> “Corrected; ekaviṃśatyau L; ekaviṃśatyai Be (sec.m.); kavimśate (or ne)ya the other MSS.” <sup>12)</sup> “sunoti ihaivātha L; sunotiḥaivātha Be (sec.m.); sunoti eṣātha the other MSS.”

## 6. 『ヴァードウーラ・アヌアーキヤーヤナ』 I1-2

訳文中の〈 〉は欠損部分, [ ]は訳文への補い, ( )は説明等の補足。

## I1

§1 ... [全] 祭式によって (を行って) 神々は天界に行った。<sup>1)</sup> 彼ら人間たち (マヌシュの子孫たち) は整っていない祭式<sup>2)</sup> によって祭式を行っても, [彼らの] 胴体だけが成長した。他のどの身体部位も [成長し] なかった。<sup>3)</sup> また, 供物は神々のもとへ到着しなかった。<sup>4)</sup> 彼ら (神々) は言った: 「人間たちは整っていない祭式によって祭式を行っているのだ。 ...

彼らはことば〈と思考とに〉言った: 「さすらい行け, 君ら (両者) は。人間たちのために祭式を整えよ」と。両者はやって来て, 人間たちに言った: 「私たちは君らの祭式を整えよう」と。彼ら人間たちに *priya-* (恋愛)<sup>5)</sup> が生じた。

<sup>1)</sup> TS 17,11,3<sup>p</sup> *sārveṇa vai yajñena devāḥ svargāṁ lokāṁ āyan* を基にした議論である, BaudhSrSu XVIII 45:400,3 にある一種の *Mīmāṃsā* を参照せよ。同所では, テーマは「祭式 *yajña-*」であり, その語が省かれた形で引用され, *etat* で受けて議論が始まる。ここでは「完全な」, 即ち「整った」祭式が議論されており, TS の *sarva-* の語を *klpta-* と解釈し, 置き換えて話が進んでゆく。TS を引用する文に *sarva-* が含まれていたかどうかは興味深い, *lacuna* によって確かめ得ない (あるいは, このことと欠落とが関連するかもしれない)。別の TS からの引用について, I2 の末尾を参照。 *teṣām* から判断して, 始めの欠損部分には, *manuṣyāḥ* (と, おそらくは *devāḥ* と) の語があったと思われる。「神々」とあるのは, *Manuṣ* の子孫ではない, 別の種族で, 完全な祭式を持っていたが故に (死後?) 天界に達することができた (その結果「神々」である), とも解釈できる。

<sup>2)</sup> 「整っていない祭式」とは, 祭火としての *Agni* が未だないことをいうものであろう。 *Agnyaḍheya* (祭火設置祭) に関して語られる *Purūṣavas* と *Urvaśī* の各ヴァージョンは, 共通して, 祭火の地上へのもたらしを語る因縁譚である。

<sup>3)</sup> *pravardhanta* 「成長した」は *Ipf/śruti* の *āyan* に引かれたものか, 背景となっている「大過去」を表示する機能と判断される。後段で, 手脚, 指の成長が語られ, 頭は問題になっていないが, 祭式の頭 (*yajñasya śiras-*) を求める一群の因縁譚 (祭

火の頭=Agniの獲得に関する神話と解釈される)との関連が問われる節もある。

<sup>4)</sup> *prāpa*「到着し(なかった)」。これ以降、(*ha* +) Perf. の語りのテンス (*itihāsa* / *ā* スタイル) が用いられる。

<sup>5)</sup> *priya*-「恋愛」については→ BaudhŚrSū XVIII 44:397,8 (*priyaṃ karavāvahai*) 参照。*priya*- は Vādh, Baudh 両 Version を通じて主題の一つとなっている。人間たちが思考と言語の能力を持つようになり、恋愛、したがって生殖が始まる。あるいは、[思考は] 彼ら人間たちに好ましいものとなった、とも。→ 注 17。

§ 2 その思考はことば (*vāc*-) に入り込んだ。それから Manu が生まれた。そのことばは Manu に入り込んだ。それから Manu の娘 *Iḍā* が生まれた。その Manu は *Iḍā* に入り込んだ。それから好ましい (*priya*-, cf. 注 5, Baudh 版冒頭 *kalyāna*-とその注) Purūravas が生まれた。その *Iḍā* は Purūravas に入り込んだ。それから Urvaśī が生まれた。<sup>6)</sup> 人間たちは Purūravas を [自分たちの] 王にした。<sup>7)</sup> Gandharva たちは Urvaśī を [自分たちの] 娘にした。<sup>8)</sup>

<sup>6)</sup> 始めの *manas*- 「思考」を除き、女性名詞と男性名詞とが交互に誕生し、Puruṣasūkta の Puruṣa と Virāj による展開の構成を取ってる。

<sup>7)</sup> 人間たちとは、Manuṣ = Manu と *Iḍā* の子孫たち、原初の人間たちとは異なる、思考、言語、恋愛を有する [洪水後の?] 今の人間たちのことか。彼らが Purūravas を王として迎え入れたことになる。

<sup>8)</sup> この箇所を BaudhŚrSū XVIII 44:397,12 *atho hāsyā eṣa pūrvacittir apsarā svasā babhūva* 「さて、この Apsaras である Pūrvacitti が彼女 (Urvaśī) の姉 (妹) となっていた」の解釈に参照すべし。この節は動詞が Ipf. (*prāviṣat*, *ajāyata*, *akurvata*) で語られている。詳しくは、後藤論文参照。

§ 3 両者は、そのようにして、人間たちのために祭式を求めてさまよった。<sup>9)</sup> その (そこで) Purūravas は狩猟をしていて、Apsaras たちに出くわした。彼らの中、ほかならぬ Urvaśī に思いを寄せた。<sup>10)</sup> 彼女を [自分の] 妻にした。彼女は胎児を [自分の中に] 置いた (身ごもった)。それを、[彼女は、生まれると] 捨ててしまった。<sup>11)</sup> 彼女は第二の胎児を身ごもった。それを、

[彼女は、生まれると] 捨てた。彼女は第三の胎児を身ごもった。それを、  
 [彼女は、生まれると] 捨てた。彼女は第四の胎児を身ごもった。彼女は言  
 った:「これは神々と人間たちの両方の食べ物を食べる者となるだろう。親た  
 ちのもとでこの者を生んでやろう (Konj.)」と。そこで Urvaśī は親たちの  
 もとへお産をするために<sup>12)</sup> 行った。それゆえ、女は、このようにまた (現に  
 また、今も)、親たちのもとへお産をするために行ってかまわない (行くこ  
 とがある)、まさにこの、神々の定めたこと (なしたこと) に従って<sup>13)</sup>。そ  
 こ (親の里) で [女が] 産む者 (子) は、食物を食べるものとなる。<sup>14)</sup> そ  
 の Urvaśī は男児を産んだ。彼に Āyu と名を付けた。それ故、今、このよう  
 に、寿命・生命 (āyus-) を āyuṣ- と [よんで] [ひとびとは] 過ごしている  
 [わけで: ha] ある、<sup>(17)</sup>「君は āyuṣ- のある人だ。これこれの人だ」といって。<sup>15)</sup>

<sup>9)</sup> 「捜し続けた」とも解釈できる。ceratur : 再びPerf.

<sup>10)</sup> abhi-dadhyaū, cf. BaudhŚrSū XXVIII 44:396,2 (: ŠB cakame).

<sup>11)</sup> pra-as:「[生まれた子を]捨てる」, cf. HOFFMANN Aufs. 431 n.29, JAMISON Hyenas 200 n.102. BaudhŚrSū 397,5f.では apa-vyadh 「抛り出す」を用いている。

<sup>12)</sup> vi-jan 「お産をする, entbinden」, vijāta- 「お産をした, entbunden」 n.19. Pitṛ-  
 たち = 里の親たち = Gandharva たち (ここでは文脈上もそういうことになるが、  
 Pitṛ- は一般に祖霊たちを意味するので、祖霊 = Gandharva という、当然の諒解も  
 働いていよう。)「ガンダルヴァ婚」(単なる恋愛婚?, 異部族間?)の名の由来  
 を考えさせる。

<sup>13)</sup> Cf. AB VIII 14,2 (文末), 3 (4 回) ... etam eva devānāṃ vihitim anu.

<sup>14)</sup> īśvara-, īśvaraḥ + Inf. -tos, cf. OERTEL Kl. Schr. 470ff.

<sup>15)</sup> つまり、「君は何々長者様です」の意であろう。āyusmant-, bhagavant- + 2人  
 称 Sg. 動詞は最も普通の敬語表現。Āyu は先に生まれた子供たちと異なり、短命  
 ではなかった。→ BaudhŚrSū 397,7 paryavetarātrayaḥ。

§4 そこで Purūravas は (里へ) さすらってやってきた、「息子を連れて来  
 よう。また、妻をも」と [考えて]。彼女のもとへやって来て言った:「君  
 は [もう] お産をしたのだ<sup>16)</sup>。親たちに何か幸運 (祝福ごと) を頼め」と。



そこで Urvaśī は親たちに頼んだ。[Āyu は] これら神々の *priyam* となった。<sup>17)</sup> 人間たちの [*priya*-であること] は当然である、神々の定めたこと(なしたこと)に従って(→ n.13)。彼女に Gandharva たちは望みを与えた(取らせた)。

<sup>16)</sup> *vi... ajaniṣṭhās* Aor. → n.12.

<sup>17)</sup> 注5) の文と外見上は同じ構造であるが、ここでは、*priyam babhūva* の主語は Āyu であろう、先に「これは神々と人間たちの両方の食べ物を食べる者となるだろう」(地上での生活と、死後、子孫の祭式に依存する天界での生活と)というのが、ここに述べられる「神々の *priya*-」, 「人間たちの [*priya*-]」となることに対応すると考えられるからである。Āyu は男性名詞であるが、*priyam* と中性単数であるのは、法律条項に関わる表現に多い *īdam bhūvas* 「... [の資格, 権利, 義務を] 得る, もっている」の構文 (cf. RV への注18-4) と考えられる。SCHELLER *Vedisch priya- und die Wortsippe frei, freien, freund* (1959) は印欧祖語 \**preth-o-* 「好ましい」が「自分に属する, *eigen*」の意味でも用いられ、ヨーロッパ系の諸現語、殊にケルト語派やゲルマン語派で「信頼のおける, 仲間の」という意味から *frei, free* に見られるような「完全な市民, 社会の一員とみなされる」という意味に展開した次第を跡付けている。その際、インドイランの文献に跡付けられなかった社会制度に関する語彙としての *priya*- 形容詞「社会, 部族の完全な成員たる資格を持つ」, 中性単数「...こと」の用例がここに発見できると思われる。当該用法は印欧祖語に遡ることになる。*devānām priya* の背景にも関わりがありうる。詳しくは、後藤論文参照。

## 12

§5 彼女に Gandharva たちは望みを与えた。<sup>18)</sup> 彼女は言った: 「[私は] 祭式を選ぶ」と。彼らは答えずに、神々の [いる] 場所 (*ardha*-) に走り上った。彼らに [Gandharva たちは] 言った: 「神々よ, お産をした<sup>19)</sup> 娘のために, (望みを...?)。... .. (祭式が) 我々の [もと] から, 丁度 [我々の] 子孫から [出て] 行くことなく, 祭式が [出て] 行くことになる, (ようにして下さい?) 」と。彼らに [神々は] 言った: 「君たちのためには [Adhvaryu 祭官が Agnidh 祭官に] *srauṣaṭ* [を言えという] 指示を (人々が) 出さない

ように。 *vaṣaṭ* の発語を（人々が）しないように。 *Darvihoma* <sup>20)</sup> だけが君たちには属する。君たちは祭式を与えてしまったのだから」と。それ故、 *Gandharva* たちのために、 [人々は] *srausaṭ* の指示を出さない。 *vaṣaṭ* を発語しない。 *Darvihoma* だけが彼らにはある（に属する）。彼らは祭式を（ひとに）与えてしまったから<sup>21)</sup>。

<sup>18)</sup> 前節の末尾と同じ文が繰り返されている。もともとは、章の区切りを示す（前の章の最後の文の）繰り返し、または続き具合を示す為に冒頭に付加された単なる覚え書きであったとも考えられる。

<sup>19)</sup> *vijata-* → n.12.

<sup>20)</sup> *mantra* なしで、 *darvi* とよばれる匙（柄杓）を用いて行われる簡単なバターオイルの献供（*Agnihotra*; *Soma* 祭では *Pravargya*, *dadhigraha*; *Upanayana* などに見られる）。

<sup>21)</sup> *pra... ayachan* *Ipf*: *Ind.Pras.* (generell) に対比されている。後藤論文参照。

§ 6 そこで *Purūravas* はほかならぬ [その] 息子を一方の手にした、祭式をもう一方の手に。それら [両者] を伴って、そのようにして [*Purūravas* は] さすらい [出た]。その [両者] を伴っては、 [彼は] 村落に向かって、降りて行きたくなかった。<sup>22)</sup> 彼は原野に祭式を置いて、息子（だけ）を伴って村落へ向かって降りて行った。彼を村落の中央に置いて後、祭式の [ある] 場所 (*ardha-*) にさすらい戻った。それが、丁度、別様の姿 [になって、] 無くなっているのに出会った。<sup>23)</sup>

<sup>22)</sup> 語順と *saha* による強調に注意。 *abhyavajigāmsat* については後藤論文参照。

<sup>23)</sup> *tam + ājagāma*: *ét + Akk.* の構文解明に資する用例である、4. *ŚB* 版、注 7 参照。

§ 7 彼は神々の [いる] 場所 (*ardha-*) に走り上った。彼らに言った:「神々よ、 [私は] 息子と祭式とを伴って村落へさまよい降りたのです\*。その両者を伴っては、村落へ向かって降り戻りたくなかったのです\*。そこで [私は] 原野に祭式を置いて、息子を伴って村落へ向かって降りて行ったのです\*。その [息子] を村落の中央に置いて、祭式の [ある] 場所へさまよい戻ったの

です\*。それが、丁度、別様の姿 [になって] なくなっているのに出会ったの  
です\*」<sup>24)</sup> と。

<sup>24)</sup> 会話中に (今しがた起こったことを報告する) Aor. が用いられている (\*):  
*ava-avrāṣam* (~ *vavrāja*), *abhyava-ajigāmsiṣam* (Aor. Desid. :: *ajigāmsat*, cf. n. 22),  
*abhyava-agan* (:: *abhyava-iyāya*), *a-avrāṣam* (:: *a-vavrāja*), *a-agamam* (:: *a-jagāma*).

§ 8 「ならば、そこで何が [君に] 出会ったのか<sup>25)</sup>」と。「これら、8 つの皿  
です」と、[彼は] 言った。「それが祭式なのだ」と。「何かもつと<sup>26)</sup>、他  
に [あるか] 」と。「ここに、一面に、草たちが生えている」と [神々は]  
言った、「それが敷き草だ。それが清めの道具だ。それが祭式なのだ。何かも  
つと (cf. n. 26) , 他に [あるか] 」と。「ここに、一面に、木々が生えてい  
ます」と [Purūravas は] 言った。「それが祭式なのだ」と [神々は] 言った、  
「それが焚き木だ。それが<sup>27)</sup> 燃料だ。それが祭式なのだ。何かもつと (cf.  
n. 26), 他に [あるか] 」と。「ここに、アシュヴァッタ (インド菩提樹) がシャ  
ミー (アカシアの一種) の上に成長しています」と [P は] 言った。「それ  
が祭式なのだ」と [神々は] 言った、「それは本物 (*satya-*: 実現力をもつ)  
だ。それが祭式に相応しい姿 (からだ) だ。それが、文字通り、祭式なのだ」  
と。

<sup>25)</sup> *tatrāgama ity* 「君は何に出会ったのか」とも。

<sup>26)</sup> *uv eva: Taittirīya* 派の *Sandhi*。

§ 9 この、祭式 [というもの] は、このようにして、Purūravas によって人  
間たちに齎された。それから、整った祭式によって人間たちは祭式を行った  
ので、[彼らの] 手脚の関節たちが<sup>27)</sup>、指の関節たちが、成長した (Ipf.)  
のだ。ちょうど (現に) 人の、この手脚の関節たち、指の関節たちが成長す  
る、そのように [である]。それ故に、今、まさしく《君は *Urvaśī* だ》と  
[唱えながら] 火鑽り台を手取るべし。《君は Purūravas だ》と {{ [唱え  
ながら] 火鑽り棒を。《君たちはバターオイルによって塗られた》と [唱え

ながら両者を]塗る。《種牛を君たちは創れ》と[唱えながら]はめる。《gāyatrīの韻律に従って子孫をつくれ》と[唱えながら]韻律たちによって(を伴って)自分の方へ向きをかえさせる(一回り回転させる)。《triṣṭubhの韻律に従って子孫をつくれ。jagatīの韻律に従って子孫をつくれ》と[唱えながら回転させる]。火鑽り木の(に対して)『10人の Hotṛ』を述べる(任命する)<sup>28)</sup>。火を鑽る。《君は Āyu》}} だ)と生まれた[火に] mantra を唱える。<sup>29)</sup> それ(その様にして生まれた火)がこの Purūravas の子 Āyu, 神々と人間たちの両方の食物を食べる, 神々の分際をもつ火, 尊い火の神なのだ。(従って: ha) このように知りつつ[自分の]祭火たちを設置する者, あるいは, このように知っている者がその者の祭火たちを設置[してやる]場合には, その者は神々と人間たちの両方の食物を食べるものとなるのだ。 [この者は], つまり(火),

<sup>27)</sup> *paruṣ-*: 厳密には, 関節から関節までの部分。 *aṅgāparūṃṣi*: AiG II-1 156 によれば, *aṅgā* (Pl.) と *parūṃṣi* によるDvandva “Glieder und Gelenke” (TS), つまり, 「手脚の諸部位と関節間の部位たち」。

<sup>28)</sup> *Daśahotṛ* とよばれる mantra を唱える意か? 10 は手の指に関連するとも考えられる。

<sup>29)</sup> 省略された部分{{ . . . }} を, ここまで, *VadhŚrSū* I 1,3,10-14 により補う。

§ 10 それについて, [人々(祭式学者 *brahmavādin* たち)は]言う: [Urvaśīが]例の, 第四の[胎児]に先立つ胎児たちとして身ごもった, それらほどの[三つ]か」と。ほかならぬ産褥の火がそれらの中の最初の[胎児]である。それによって[人々が]死者を焼く[火], それが第二の[胎児]である。それによって, このように(現に), 女たちが腹(母胎)を整える[火]<sup>30)</sup>, それが第三の[胎児]である。これら[の火]<sup>31)</sup>のことを次の *brāhmaṇa* (TS II 6,6,1) は論及しているのである: 「Agni には年長の三兄弟があった。彼らは神々へ[献ぜられた]供物を運んでいるとき, 破滅した」と。それはこの[三兄弟]なのである。

<sup>30)</sup> *Garbhādhāna* (受胎を祈願する *Grhya* 祭式) に用いられる火であろう。

31) 何れも、~~G~~r̥hya 祭式に関わる火である。

## 原文 Vādhūla-(Śrautasūtra-)Anvākyāna I 1-2

便宜的に § に分割して提示する。+ は（井狩による写本の，または筆者による Ed. の，何れも軽微な）修正；（ ）内の数字は井狩が推定する欠損音節数。写本では，語末の *m* が発音どおり次の語頭の子音と同系列の鼻音として表記されているが，Ed. IKARI に従い，そのままにした。

### I 1 (I 1,1)

§ 1 ... (20) [ya]jñ[e]na devās suvargaṃ lokam āyan. teṣāṃ manuṣyāṇām akṣptena yajñena yajamānānām kusindhāny eva prāvārdhanta. nānyāni kāni canāṅgāni. no ha devān havyaṃ prāpa. te devā abruvan. manuṣyā vā akṣptena yajñena yajante. tenainena ta ṛdhv ... (12) ti. te vāca ... (6) bruvan. vrajataṃ yuvam. manuṣyebhyo yajñam kalpayatam iti. tau hāgatya manuṣyān ūcat. āvaṃ vai vo yajñam kalpayisyāva iti. teṣāṃ ha manuṣyāṇām priyaṃ babhūva.

§ 2 tan mano vācaṃ prāviśat. tato manur ajāyata. sā vān manuṃ prāviśat. tata idā mānavy ajāyata. sa manur idām prāviśat. tataḥ purūravā aido 'jāyata. sedā pu[rūravasaṃ] prāviśat. tata urvaśy ajāyata. manuṣyā ha purūravasaṃ rājānam akurvata. gandharvā horvaśin duhitaram akurvata.

§ 3 tau tathā manuṣyebhyo yajñam icchantau ceratus. sa ha purūravā mṛgayāñ carann apsaraso 'dhijagāma. tāsāṃ horvaśim evābhidadhyau. tāñ jāyāñ cakre. sā garbhan dadhe. taṃ paraivāsa. sā dvitīyan dadhe. taṃ paraivāsa. [sā tṛtī]yan dadhe. taṃ paraivāsa. sā caturthan dadhe. sā hovāc<sub>a</sub> -āyam ubhayeṣān devamanuṣyāṇām annādo bhaviṣyati. piṭṛṣv imañ janayānīti. sā horvaśi piṭṛn vijanitum iyāya. tasmād utaitat strī piṭṛn vijanitum iyād. etām evānu devavihitim. īśvaro hānnādo bhavitor yan tatra janayati. sā horvaśi pumāṃsañ janayāñ cakāra. tasya hāyur iti nāma dadhus. tan nu haitad āyur āyur iti caranṭy. āyusmān asīttham asīti.

§ 4 sa ha purūravā āvavrāja. putram ānayaṣyāmi. jāyām u ceti. tāṃ hāgatyovāca. vi vā ajanīṣṭhā. yāca piṭṛñ kiñ cit kam iti. sā horvaśi piṭṛñ yayāc<sub>a</sub> -aiśāṃ ha devānām priyaṃ babhūva. sādhu yan manuṣyāṇām ev<sub>a</sub> -ānu devavihitim. (tasyai ha gandharvā varan daduḥ.)<sup>1)</sup> [end mark]

<sup>1)</sup> 写本ではここに次節の第一文があらかじめ提示されて，節の交替の印となっており（VādhŚrSū に共通する慣行），次節の冒頭は *tasyai = dadus* と省略形で記される。

### I 2 (I 1,2)

§ 5 tasyai = dadus [ : tasyai ha gandharvā varan dadus ]. sā hovāca. yajñam vṛṇa iti. te hāpratyucya devānām ardham uddudruvus. tān hocur. devā duhitre vai vijātāyai va ... (15+18) yajño gamiṣyati netvā asmattanād iva iti. tān hocur. na khalu yuṣmabhyam āśrāvayān. na vaṣatkaravān. darvihoma eva yuṣmākaṃ. pra hi yūyaṃ yajñam adātetī. tasmād gandharvebhyo nāśrāvayanti. na vaṣatkurvanti. darvihoma eva teṣāṃ. pra hi te yajñam ayacchan.

§ 6 *sa ha purūravāḥ putram evetarasmin haste cakre, yajñam itarasmimś. tābhyān tathā vavrāja. tābhyām ubhābhyām saha grāman nābhyavajjigāmsat. so 'ranye yajñan nidhāya putreṇa saha grāmam abhyaveyāya. tam madhye grāmasya nidhāya yajñasyārdham āvavrāja. tam anyathārūpam ivāntarhitam ājagāma.*

§ 7 *sa ha devānām uddudrāva. tān hovāca. devāḥ putreṇa ca yajñena ca saha grāmam <sup>+</sup>āvavrājiṣan (K<sub>1</sub> avavrājiṣan). tābhyām ubhābhyām saha grāman nābhyavajjigāmsiṣam. so 'ranye yajñan nidhāya putreṇa saha grāmam abhyavāgān. tam madhye grāmasya nidhāya yajñasyārdham <sup>+</sup>āvvrājiṣan (K<sub>4</sub> āvavrājiṣan). tam anyathārūpam ivāntarhitam āgamam iti.*

§ 8 *kim u tatrāgamad ity. etāny aṣṭau kapālānīti hovāca. sa vāva yajña iti hocuḥ. kim uv evānyad ity. etā oṣadhayo 'bhito jātā iti hocus. tad barhis. tāni pavitrāṇi. sa vāva yajñāḥ. kim uv evānyad ity. ete vanaspatayo 'bhito jātā iti hovāca. sa vāva yajña iti hocus. sa idhmas. sa edhas. sa vāva yajñāḥ. kim uv evānyad ity. eṣo 'śvatthās śamyām rūḍha iti hovāca. sa vāva yajña iti hocus. tat satyam. sā yajñīyā tanūs. sa vāva yajñāḥ pratyakṣam iti.*

§ 9 *sa eṣa evam āhr̥to yajñāḥ purūravasā manuṣyebhyas. tato vai manuṣyānām kḷptena yajñena yajamānānām aṅgāparūṃṣy aṅguliparūṃṣi prāvardhanta. yathemāni puruṣasyāṅgāparūṃṣy aṅguliparūṃṣi pravardhanta evan. tasmān nu horvaṣy asīty evāraṇim ādadīta. purūravā ity u=yur<sup>\*)</sup> asīti jātam abhimantrayate. sa vā eṣa āyuh pauraṇvasa ubhayeṣān devamanuṣyāṅām annādo bhavati, ya evaṃ vidvān agnīn ādhatte, yasya vaivam vidvān agnīn ādadhāti.*

\*) 省略部分は Vādhūla-Śrautasūta I 1,3,10-14 に相当 (ローマン体は mantra, 太字は Anvākh にある, または相当する文字)。Cf. IKARI, Ed. 同所に対する n.90。この Anvākh の筋に必要な 3 つの mantra 《*urvaśy asī*》, 《*purūravā*》, および 《*āyur asī*》 (āyur asī の ā を除いて) 省略されておらず, ŚrSū. の中身を *eva ... ādadīta* と言い換えて, 以後の (本物語には必須でない) 部分を省略している:

*prokṣyāgner janitram asīti śakalam ādatte. vṣaṇau stha iti vṣṣāṇāv. uvrvaśy asīty araṇim. purūravety u-  
ttarāraṇim. gḥṣtenākta ity anakti. vṣaṇan dadhāthām ity avadadhāti. gāyatrañ chando 'nu prajāyasveti chandobhir ātmānam abhi nīvartayate. traiṣṭubhañ chando 'nu prajāyasva jāgatañ chando 'nu prajāyasveti. daśahotāram araṇyor vyācaṣṭe. manthanty agnim. ā-  
yur asīti jātam abhimantrayate.*

§ 10 *tad ahur. yāms tāms <sup>+</sup>turīyāt pūrvān<sup>+</sup> (Ed. turīyapūrvān) garbhān adhatta katama eta iti. sūtakāgnir eva teṣāṃ prathamā. yena mṛtan dahanti sa dvitīyo. yenaivaitat striya upastham<sup>+</sup> kalpayante (Ed., Hs. kalpante) sa tṛtīya. etān ha vāvaitat brāhmaṇam adhivadaty agnes trayo jyāyāmso=prāmīyantey<sup>\*)</sup>.<sup>\*)</sup> ete ha vāva te. [end mark]*

\*) *agnés trayo jyāyāmsō bhrātara āsan. té devébhyo havyám váhantaḥ prāmīyanta* TS II 6,6,1 (cf. IKARI Ed. 同所 n.100)。